昭和十九年三月

昭和十七・十八年度臺灣總督府農業試驗所主催

各州廳立農事試驗場病理昆蟲主任協議會錄

臺灣總督府農業試驗所

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

正誤表

頁	行	誤	正
二	一一	照・雨量	溫・雨量
五	一	棉西指導所	棉作指導所
五	二	作部	西部
一二	一〇	「キスヂノミハムシ」	「キスヂトビハムシ」
二八	一三	二斯作	二期作
三四	六	Telenomu s sp.	Telenomus sp.
三九	一二	甘蔗野螟蛾	甘藷野螟蛾
四二	一	硝子飼育	硝子器飼育
四三	一八	有スルモノノ知ク	有スルモノノ如ク
八九	二	撤布	撒布
八九	一三	撤布	撒布
九二	一三	撤布	撒布
一〇四	一	稻穗熱病	穗稻熱病
一七〇	一三	〇一五立	〇・一五立
一七八	一三	溫度	濕度

農業部農業試驗所典藏
由國家圖書館數位化

第十二回各州廳立農事試驗場病理昆蟲主任技術員協議會

協議場所及ビ開催日　昭和十八年十二月三、四日　於臺灣總督府農業試驗所

協議次第

一、國民儀禮

二、開會之辭

三、農業試驗所長挨拶

四、農務課長挨拶

五、指示事項

(一) 螟蟲驅除豫防ニ關スル件

(二) 農用藥劑配給ニ關スル件

六、報告事項

(一) 昭和十八年度事業成績ニ關スル件

(二) 昭和十八年度ニ於ケル病害蟲發生狀況ニ關スル件

(三) 昭和十九年度事業計畫ニ關スル件

七、協議事項

(一) 昭和十九年度協同試驗ニ關スル件

八、閉會之辭

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE

挨拶

各位ニハ御多忙中ニモ拘ラズ御參集下サレマシテ恐縮ニ堪エマセン。顧マスレバ昭和七年農事試驗場長會議ノ決議ニ基キマシテ同年度、卽チ昭和八年一月二十三日第一回ノ病蟲害主任技術員打合セ會議ヲ開催シマシテヨリ玆ニ十一年、今回第十二回目ノ會議ヲ催ス次第トナツタノデアリマス。每年一回ノ此會合ハ技術者相互ノ意志ノ疏通ヲ助成シ、同時ニ農事試驗研究機關ノ聯絡ノ緊密度ヲ增シ技術上ノ融和連繫ヲ圓滑ニ運ビ、以テ臺灣農業ノ發達ニ寄與スル處甚大ナルモノガアツタト確信シテヰル次第デアリマス。申ス迄モナク病蟲害防除ニ關スル試驗研究ニ携ツテヰラレル各位ニハ、食糧增産確保ノ一翼ヲ擔當シテ使命ニ邁進シテオラレル譯デアリマスガ、病蟲害防除ノ根本理念乃至ハ基礎的理論ト申スモノガ確立セラレマシテモ、是ヲ實地ニ應用シ其成果ヲ期スル爲ニハ、各地方ガ其民情・土地・氣象環境・人・能力・豫算等アラユル要素ヲ取リ入レテ考慮シナケレバナラヌノデアリマシテ、此點ガ特ニ各擔當技術者ニ果セラレタ重大使命デアラウカト考ヘラレル次第デアリマス。此意味ニ於キマシテ各試驗場ハ各地夫々其環境ニ卽應シタ有效適切ナル防除手段ヲ研究ス可キデアリマス。例ヘバ氣溫・雨量ノ變化等ハ申スニ及バズ、山脚・平地・土質・土性ノ關係、中間作地帶、兩期作田、其他輪作關係等細目ニ亙ツテ考慮シナケレバナラナイノデアリマス。病蟲害防除ハ個々ノ専門的知識ノミニテハ解決セラル可キモノデハナク、昆蟲學・植物病理學ハ申スニ及バズ、農學、化學、物理學、氣象學、土壤學、肥料學等アラユル知識ノ總親和ニ依ツテ初メテ價値アル研究ガ生レ、其成果ガ期待セラレルノデアリマシテ、獨善行爲ガ樣々ナ障害ヲ起シテ惡結果ヲ齎シタ例ハ過去ニ於テ屢々見ラレルノデアリマス。各部門ノ協力總親和ニ依ツテ與ヘラレタル使命ノ達成ニ完璧ヲ期ス可キデアリマセウ。第十二回ノ本會議ガ從前ニモ增シテ有效ナル結果ヲ期スルニハ參集各位ノ自覺ト熱誠ニ俟ツ處甚大ナルモノガアラウカト考ヘル次第デアリマス。

時局多端、御多用中ニモ拘ラズ特ニ府當局ヨリ農務課長初メ多數ノ御參列ヲ得、感謝ニ堪エマセン。以上ヲ以テ御挨拶ニ代

ヘタイト存ジマス。

昭和十九年十二月三日

會議出席者

臺灣總督府農業試驗所長　磯　永吉

府農務課

農務課長　松野孝一
同　技師　犬飼圓碩
同　同　三坂和英
同　屬　伊藤正盛
同　技手　內田稔也

州試驗場

臺北州

技手　齋藤巖
同　市川五四郎
同　淺野弘
同　陳茂森

新竹州

同　河野八郎

臺中州

同　橋岡良夫

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

臺南州　技手　大島鹿三郎

高雄州　同　山保禮助

府試驗所

所長　磯永吉

總務課長　矢野榮治

病理昆蟲科長　三輪勇四郎

農藝化學科長　大野成雄

育種農藝科長　加茂巖

畜產科長　蒔田德義

育種農藝科技師　片山廣

病理昆蟲科技師　德永芳雄

同　技手　楚南仁博

同　同　小川正行

同　同　水戸野武夫

育種農藝科技手　鈴木直治

府試驗所支所

嘉義　技手　福田計

鳳山　技師　福田仁郎

雇　東出定則

TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

棉西指導所

作部 技手 鹽田弘行

東部 同 赤坂靜雄

植物檢查所 技手 末田平七

同 大川義弘

計 三二名

指示事項

一、螟蟲驅除豫防ニ關スル件

三坂技師ヨリ左ノ事項ニ關シ說明アリタリ。

(一) 誘蛾燈設置ニ當リ種々ノ出疑ガ各州廳試驗場宛照會ガアル事ト豫想セラル。就而本件ニ關シ次ノ事項ニ就キ補足的說明ヲ加フ。

(イ) 點燈時間

夕方ヨリ十一時頃迄トス。

(ロ) 取扱法

本器ハ各市街庄ニ一燈ヲ設置スルモノトシ、一名ガ飛來害蟲ノ種類竝ニ數量ヲ每日調査シ、一定期間即チ五日目每ニ市郡ニ報告スルモノトス。市郡ハ各庄ノモノヲ一括シ五日目每ニ定期ニ報告シ、各州廳ハ府ニ報告スルモノ

トス。即チ三段構ヲ綜合結果ニヨリテ驅除ノ效果ヲ擧ゲントスルモノデアル。尙出來得レバ考察事項ヲモ附記サレ度シ。同時ニ大發生ノ徴候又ハ傾向アル時ハ速カニ連絡スベシ。

巡回ヲ平行的ニ行ヒ處理法ニツキ指導スル樣御敎示願ヒ度シ。

（ハ）設置期間

自第一期苗代期至第二期收穫期

（二）寄生蜂ニ關スル事項

保護器ハ大小二種ノ甕ヲ使用スルモノトシ、全島ニ第一回ノ試ミトシテ一八〇〇個ヲ設置スル計畫ナリ。卽チ各郡三〇個宛ノ見當ニ配置スル。

二、農業藥劑配給ニ關スル件

伊藤屬ヨリ農業藥劑ノ配給機構ニ關シ說明アリタリ。

質疑

（高雄）生石灰ノ入手困難ナリ。生石灰ハ農藥ナリヤ。

（伊藤屬）農藥ノ取扱ヒヲナサズ。然シ乍ラ高雄ニ於テハ近ク會社ガ出來ル筈デアル。容器ガ常ニ如斯藥劑ヲ配布スル場合缺乏シ困却スルヲ以テ豫メ容器ニ留意セラレ度シ。尙除蟲菊乳劑モ速カニ注文セラレル方ガ可ナラン。

「ホルマリン」ハ入荷ノ見込ミナシ。

（臺南）二硫化炭素ハ農藥ニ入ルヤ又入手法ナキヤ。

（三坂技師）少量ナレバ植物檢査所ヨリ分讓シテモ可ナリ。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

報告事項

臺北州立農事試驗場

一、昭和十八年度事業成績

（イ）稻熱病防除試驗

(1) 種籾消毒藥劑撒布ニヨル防除試驗（協同試驗成績表參照）

（ロ）(1) 目的　稻熱病ニ對スル珪酸ノ効果ニ就テハ既ニ多クノ研究報告アルモ實用的ニ應用スルニ至ラザルヲ以テ、實際問題トシテ苗代ニ於ケル珪酸ノ施用ト稻熱病トノ關係ヲ調査ス。

(2) 試驗方法

A　珪酸鹽ノ使用量

市販珪酸「ソーダ」ヲ膠質狀態ニ調製シ播種一日前ニ床面ニ撒布ス。珪酸使用量ハ苗代坪當二一五瓦、四三〇瓦及ビ八六〇瓦ノ三種ヲ施用セリ。

B　耕種法

a　品種　臺中六五號

b　肥料　肥料ハ全部基肥トセリ。燐酸加里ハ反當各八〇瓩、窒素八八〇、一二〇、一六〇瓩ノ割トセリ。

c　管理　管理ハ常法ニ依リタリ。播種ハ一月三十日、挿秧ハ三月十二日、收穫ハ七月五日

(3) 試驗成績

施肥料	試驗區	調查穗數	穗イモチ穗數	發病率	籾收量	指數	備考
窒素二貫區	無消毒區	一〇八本	一九本	一七・五%	一,一二〇(g)	一〇〇	イモチ調査資料ハ各六〇株、收量ハ各六〇株當ヲ示ス
	ウスプルン區	一一九	一〇	八・四	一,一六〇	一〇三	
	珪酸少量區	一一七	二三	一九・六	一,一六〇	一〇三	
	珪酸中量區	一〇六	一二	一一・三	一,一九〇	一〇六	
	珪酸多量區	一一八	一八	一一・二	一,一八五	一〇五	
窒素三貫區	無消毒區	一二七	四三	二五・一	一,三五〇	一〇〇	同右
	ウスプルン區	一三六	二七	一九・八	一,三三〇	九九	
	珪酸少量區	一四四	二〇	一三・八	一,三五〇	一〇〇	
	珪酸中量區	一五六	三八	二四・三	一,四〇〇	一〇三	
	珪酸多量區	一三六	二八	二〇・六	一,四六八	一〇八	
窒素四貫區	無消毒區	一七二	三五	二〇・八	一,三三五	一〇〇	同右
	ウスプルン區	一四一	一〇	六・九	一,一七八	九六	
	珪酸少量區	一七八	一六	八・九	一,三〇〇	一〇六	
	珪酸中量區	一五四	二〇	一二・七	一,四二八	一一六	
	珪酸多量區	一六二	一九	一二・四	一,三一〇	九八	

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

宜蘭郡土圍試驗地

施肥料	試驗區＼調査項目	穗イモチ	指數	籾收量	指數	備考
窒素二貫區	標準區	六〇%	100	二,六二一(g)	100	羅病數字ハ肉眼鑑定ニヨリ、收量ハ三坪當ノ量ヲ示ス
	珪酸少量區	五〇	八三	三,一一五	一一九	
	珪酸中量區	五〇	八三	三,〇二五	一一五	
窒素三貫區	標準區	八五	100	二,四二〇	100	同右
	珪酸少量區	八五	100	二,六二一	一〇八	
	珪酸中量區	八五	100	二,七三三	一一三	

成績概要

本田挿秧後ハ氣象條件ニ惠マレ「葉イモチ」ハ昨年ノ如キ發生ヲ見ズ、各區共極メテ輕微ニシテ被害程度ノ差ヲ認メ難シ。「穗イモチ」(「枝梗イモチ」ヲ含ム)ハ出穗後ニ少數ノ發生ヲ見タルモ、ソノ罹病率ハ大同少異ナリ。「ウスプルン」消毒及ビ珪酸處理區ハ無消毒區ニ比シソノ罹病步合少ク、藥劑處理ノ効果ヲ認メ得ラル。收量ニ就テハ十七年度ニ比較シテ明瞭ナラザリシモ、珪酸處理區ハ無消毒區ニ比シ稍々收量高シ。「ウスプルン」消毒區ハ却ツテ收量ヲ減ジタリ。

宜蘭試驗地ニ於テモ珪酸處理區ハ標準區ニ比シ罹病步合少ク收量高ク、菜寮試驗地ト大體一致シ、苗代ニ珪酸ノ施用ハ實用的價値アリト思料セラル、モ更ニ回ヲ重ネ研究スル要アリト認メラル。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

二、昭和十八年度ニ於ケル病害蟲發生狀況

（イ）水稻

(1) 稻熱病

第一期作葉稻熱病ハ多少ノ發生ヲ見タルモ差シタル被害ヲ認メザリキ。穗稻熱病ニ就テモ宜蘭郡ノ一部、羅東郡ノ一部ニ於テハ甚大ナル被害ヲ蒙リタル地方アリシガ極少部分ノ極少面積ニ過ギズ。然ルニ殆ド其憂ナシトサレキタル第二期作ニ於テ宜蘭郡礁溪庄（塭底、武暖、柴圍）、頭圍庄（三抱竹）、壯圍庄（壯五、古亭笨、五間、土圍）、羅東郡三星庄天送埤、白眉、阿里史、大埔一帶ニ穗稻熱病ノ大發生ヲ見タリ。大部分「枝梗イモチ」ニシテ、是ニ「穗頸、節イモチ」ヲ伴ヒ罹病率ハ甚シキハ七乃至八割、殆ド收穫皆無ノ狀態ノモノモアリタリ。又基隆郡双溪庄ニ於テモ穗稻熱病ニヨル相當甚大ナル被害アリタル模樣ナリ。

(2) 害蟲發生狀況

a 第一期作ニ於テハ州下害蟲發生ニヨル被害ハ大シタルコトナカリシ模樣ニシテ、全般的ニ螟蟲ニヨル多少ノ被害ヲ認メタル外、農林課ニ來タル報告ニヨレバ、四月上旬宜蘭郡（礁溪庄、員山庄）、四月下旬海山郡（三峽街、鶯歌街、中和庄）五月上旬ニ七星郡（北投街大坑）ニ「ドロオヒムシ」ノ發生ヲ見、六月上旬ニ淡水郡（三芝庄）、八月中旬ニ七星郡（士林街山子後）ニ「イネトゲトゲ」ノ發生ヲ見タリト云フ。

b 第二期作ニ於テハ「イネトゲトゲ」ハ八月中・下旬ニ基隆郡（平溪庄東勢格十分寮）、七星郡（北投街…紗帽山）、海山郡（中和庄…二八張、潭墘、溪州）、新莊郡（新莊街頂思子）、淡水郡（車埕）、九月上旬ニハ臺北市七星郡ノ一部ニ發生ヲ見タリ。九月上旬七星郡（浮洲子）、九月中旬新莊郡（五股庄洲子）、七星郡（北投街嗄嘮別）ノ一部ニ「コアヲヨタウ」ノ發生ヲ認ム。

「浮塵子類」ハ八月下旬新莊郡(新莊街溝子墘)、九月上旬ニハ七星郡(士林街福德洋)、基隆郡(貢寮庄田寮洋)、九月中旬ニ基隆郡(貢寮庄新社田寮)ノ一部ニ發生ヲ見タリ。螟蟲類ハ州下全般的ニ多少ノ被害ヲ見タルモ、比較的程度ノ大ナリシハ汐止街、士林街附近、北投街石牌附近金山ノ一部等ナリキ。

以上要スルニ第二期作ハ宜蘭郡、羅東郡ノ一部ニ於ケル穗稻熱病ヲ除キ被害ハ輕微ニ終始セリ。

(ロ)蔬菜

(發生地ノ記入ナキハ當場園藝部圃場ナリ)

病蟲害名	發生又ハ調査ノ時期(月)	(旬)	加害作物名	發生地	摘要
夜盜蟲	一	下	馬鈴薯		水田裏作
コナガ	二	上	甘藍、花椰菜	新莊郡下	
コナガ	五	中	甘藍		
蚜蟲	五	中	里芋		
露菌病、赤澁病、蚜蟲、赤ダニ	五	上	胡瓜		
赤澁病、青枯病	七	上	菜豆、馬鈴薯	七星郡北投街竹子湖	

農業部農業試驗所 1895

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

マメハンメウ 腐敗病	六下	衣笠菜豆 甘藍	七星郡士林街山子後 淡水郡三芝庄車埕	
疫病 腐敗病	自七下至八下	里芋		
菜豆モグリバヘ	七中—八下	衣笠及ビ蔓無菜豆	七星郡北投街竹子湖	
蚜蟲	自八中至十二下	里芋		
ハイマダラノメイガ	九中	大根、白莖甘藍、花椰菜		甚ダ多シ 花椰菜ニハ比較的少シ
赤ダニ	九中	扁豆		
フタテンコミドリヨコバヒ	九中	茄		
腐敗病	九中	八月三日播ノ大根		
心喰蟲 キスヂトビハムシ	八—九	大根、白菜、蕪菁	七星郡北投街竹子湖	蕪菁ハ「キスヂノミハムシ」ノ被害特ニ大ナリ
フタテンコミドリヨコバヒ	九下	菜豆、茄		
心喰蟲 インゲンモグリバヘ	十上	甘藍 菜豆	海山郡板橋街江子翠	
イッモンメイガ	十上	茉莉	海山郡板橋街江子翠	
ヤマイモメクラガメ	十上以降	山芋	當場 七星郡士林街公館地	
タマナギンウハバ	十一中	甘藍		
コナガ タマナギンウハバ	十二上	甘藍 白菜	海山郡板橋街江子翠 臺北市東園町 新莊郡	
アワノメイガ	十二上	玉蜀黍	海山郡板橋街江子翠	

（ハ）マメモグリバヘ防除試驗

小豆、菜豆等ニ被害劇甚ナル「マメモグリバヘ」ヲ初期ノ藥劑撒布ニ依リ殺卵シ、被害ヲ防除セントシテ次ノ如キ試驗ヲ施行セリ。

(1) 供試作物及ビ品種

a 豫備調査　荳科作物七種類（第一表參照）

b 藥劑撒布試驗　菜豆（品種、衣笠）

(2) 方　法

a 豫備調査　播種十月二十五日、調査十一月三十日

b 藥劑撒布試驗　播種十月十八日、供試藥劑四種（第三表參照）、供試面積各區二六平方米、間引二回、收穫ハ採種用トシテ莢黃變後行ヘリ。

(3) 調　査　害蟲ノ寄主植物選擇性、被害部位、間引個體及ビ收穫後ノ被害率調査、收量調查

(4) 試驗成績

A 豫備調査

第一表　寄主植物ノ選擇性

作物名	豇豆	小豆	菜豆	萊豆	豌豆	落花生	蠶豆
調査本數	七四	八一	七二	四五	二二	七九	五〇
被害本數	六四	六一	四三	二六	一	〇	〇
被害率	八六·五%	七五·三	五九·七	五七·八	四·五	〇	〇

第二表　被害部位調査

作物名	調査本數	被害本數	內譯：土際、喰害	內譯：初生葉基部喰害	內譯：同右兩者喰害
豇豆	七四	六四	六四	〇	〇
小豆	八二	六二	五八	二	一
菜豆	七三	四三	二〇	八	一五
萊豆	四五	二六	二三	二	一
豌豆	三	一	一	〇	〇
落花生	七九	〇	〇	〇	〇
蠶豆	五〇	〇	〇	〇	〇

B　藥劑撒布試驗

第三表　成績

區別	供試藥劑	第一回間引（十一月五日）調査本數	第一回間引（十一月五日）被害本數	第一回間引（十一月五日）被害率	第二回間引（十一月二十日）調査本數	第二回間引（十一月二十日）被害本數	第二回間引（十一月二十日）被害率	收穫後（二月二十日）調査本數	收穫後（二月二十日）被害本數	收穫後（二月二十日）被害率
一	ネオトン二〇〇倍液	一三二	〇	〇	一三二	一四	一〇·六	一一二	四五七	四·一
二	ピレオール一〇〇〇倍液	一一〇	〇	〇	五九	二〇	三三·四	一一四	七〇八	六·二
三	硫酸ニコチン八〇〇倍液	一二八	〇	〇	一三三	六	四·五	一二三	二六三	二·一
四	煙草末撒布（株當三〇瓦）	一〇八	〇	〇	一二九	九	七·〇	一二九	五七二	四·四
五	標準區（無撒布）	一一六	〇	〇	一〇九	三六	三三·〇	一一三	四五四	四·〇

第四表　收量調査

區別	收穫期 始	收穫期 終	一區當 莢數	一區當 重量
一	一月二十四日	二月二十日	二、三五三	瓦 六、三一五
二			二、六四九	七、一五五
三			三、二三四	五、五四七
四			三、六二三	七、七五〇
五			三、七二九	八、〇九五

摘要

a　各藥劑ニハ展着劑トシテ農藝用石鹼水一斗ニ付二〇匁加用。

b　第一回間引ハ本葉三―四枚、第二回ハ同八―九枚開展セルトキニ行ヘリ。

c　藥劑撒布ハ十一月二日、六日、十二日、二十一日、三十日ノ五回ニ實施セリ。

(5)　總括

各種豆科作物中、豇豆、小豆、菜豆、萊豆ノ如キ莖圓キ種類ニ被害多ク、豌豆、落花生、蠶豆ハ殆ンド被害ヲ見ズ。而シテ細莖ノ小豆、菜豆ハ枯死スルコト多ク、豇豆、萊豆ノ如キハ寄生甚ダシキモ枯死スルコト少ナシ。硫酸「ニコチン」ハ殺卵ノ効力相當顯著ナルガ如キモ收量最モ劣リ、煙末撒布ハ忌避劑トシテ効力アルモノ、如シ。

三、昭和十九年度稻熱病ノ防除試驗計畫

(イ)　稻熱病ニ對スル珪酸鹽ノ影響試驗

(1)　目的

水稻々熱病ノ防除對策上珪酸ノ效果ニ就テハ既ニ多クノ研究報告アルモ、實用的ニ應用スルニ至ラザルヲ以テ實際問題トシテ苗代ニ珪酸ノ施用ト稻熱病ノ關係ヲ調査セントス。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

(2) 方法

A 珪酸鹽ノ調製

市販賣「珪酸ソーダ」ヲ一定ノ温水ニ溶シ、是ニ稀硫酸ヲ加ヘテ珪酸鹽ヲ沈澱セシメ、十分ニ水ヲ以テ酸性デナクナル迄洗ヒ播種一日前ニ床面ニ施用ス。

B 珪酸使用量　一坪當

a 「珪酸ソーダ」トシテ　一〇〇瓦
b 〃　二〇〇瓦
c 〃　三〇〇瓦
d 〃　四〇〇瓦
e 〃　五〇〇瓦

C 肥料　一ヘクタール當（瓩）

區分＼肥料別	窒素	燐酸	加里
窒素二貫區	八〇	八〇	八〇
窒素三貫區	一二〇	八〇	八〇
窒素四貫區	一六〇	八〇	八〇

(3) 圃場試驗

品種　臺北八號

試驗面積　各五坪當ヲ二區制トス。

區別

珪酸　一〇〇瓦區

〃　二〇〇瓦區

〃　三〇〇瓦區

〃　四〇〇瓦區

〃　五〇〇瓦區

珪酸處理水洗區　根本ニ附着シタル珪酸或ハ苗代期間ニ吸收サレタル珪酸ノ效果ヲ明カニスルガ爲ニ、一日珪酸處理苗ヲ一度水洗シテ使用ス。

無消毒區

ホルマリン消毒區

籾殼灰（黑）

籾殼灰（白）

骨石

珪藻土

(4) 菌ノ接種試驗

上記ノ方法ニ依リ珪酸鹽處理及ビ無處理ノ苗ニ就テ接種シ、ソノ罹病步合ヲ調査ス。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

(ロ)(イ) 若苗
出穗當初

(5) 調査
(イ) 若苗及ビ收穫後ノ藁中ノ珪酸含量調査(分析ニ依ル)
(ロ) 葉穗及ビ節稻熱病ノ罹病步合調査
(ハ) 籾及ビ藁ノ收量調査

新竹州立農事試驗場

一、昭和十八年度事業成績

(イ) 誘蛾燈調査(燭光四〇ワット)

(1) 一點大螟蛾　一月飛來ナク二月ニハ一四、三月ニハ稍々增加シ、七月ニ最モ多ク雄一八八九四、雌九八三三四ヲ誘殺セリ。又十月ニテハ雄一六四、雌三八八四ト減少セリ。

(2) 背白浮塵子　一月ナク、二月二九四、三月多ク一一六八四、四月減少シ一七七四、七月最モ多ク五七四二八四ヲ得タリ。尙十月ニハ四五〇二四ヲ採集セリ。

(3) 稻熱病(協同試驗成績表參照)

(4) 黃麻炭疽病(同)

二、昭和十八年度ニ於ケル病害蟲發生狀況

（イ）本場　棉　「フタテンコミドリヨコバヒ」及ビ「ワタノメイガ」

甘藷　「サツマイモノメイガ」及ビ「アリモドキザウムシ」・

白菜及ビ大根　「サルハムシ」、「キスヂトビハムシ」ノ發生ヲ見タリ。

（ロ）昭和十八年第一期作病蟲害被害狀況　（新竹州下）

市郡別	稻熱病 面積（甲）	稻熱病 程度（%）	胡麻葉枯病 面積（甲）	胡麻葉枯病 程度（%）	泥負蟲 面積（甲）	泥負蟲 程度（%）	螟蟲 面積（甲）	螟蟲 程度（%）
新竹市	五七・〇〇	八	―	―	―	―	七・四〇	五
新竹郡	六四・〇〇	一五	八五一・〇〇	八	一二五・〇〇	五	―	―
中壢郡	四〇二・二〇	二〇	一、三五三・〇〇	一五	一〇二・〇〇	輕微	―	―
桃園郡	二・五〇	八〇	七四六・九〇	二〇	二三五・三〇	四	―	―
大溪郡	六四・五〇	二五	―	―	一二四・九九	三	―	―
竹東郡	七・五〇	三五	―	―	―	―	―	―
竹南郡	一三八・五五	二五	―	―	―	―	―	―
苗栗郡	一八五・六九	二〇	四・〇〇	五	七・〇〇	輕微	四、九六三・三〇	四
大湖郡	一三八・三三	二五	―	―	―	―	五二三・〇〇	一
計	一、〇六〇・二七	―	二、九五四・九〇	―	五九四・二九	―	五、四九三・七〇	―

(八) 昭和十八年第二期作病蟲害被害狀況

種別	被害(發生)面積	程度	摘要
稻熱病	三六五甲	一〇%	
胡麻葉枯病	一一五	一〇	
浮塵子	六、一九〇	五	
鐵甲龜	七一	五	
螟蟲類	一、三三三	一〇	

三、昭和十九年度事業計畫

(イ) 誘蛾燈調查(一點大螟蛾、二化螟蟲、「ツマグロヨコバヒ」「セジロウンカ」ノ誘殺率ノ調查)

(ロ) 「サツマイモノメイガ」調查(收量ニ及ボス影響ニ就テ調查セントス)

(ハ) 「ワタノメイガ」發生狀況調查

(ニ) 稻熱病防除試驗

(ホ) 黃麻炭疽病調查(氣象狀態ニヨル發生期及ビ最盛期ノ調查ヲ行ハントス)

質疑

(三坂技師)「エビガラスヾメ」ノ調查成績アリヤ。

(河野技手)竹南ニ發生ヲ見タルモ調查ハ行ハザリキ。

臺中州立農事試驗場

一、昭和十八年度事業成績

(イ) 稻熱病防除藥劑施用試驗

(ロ) 稻熱病防除水滴除去試驗(附　稻株層內胞子浮游數ノ時間的變化竝ニ菌侵入ト溫度及ビ水滴滯留時間トノ關係)(協同試驗成績表參照)

(ハ) 稻熱病ノ流行機構ニ關スル基礎實驗

流行ヲ制禦スル重要要素ハ次ノ三者ナリ。

(1) 稻熱病菌ノ發育ト溫度トノ關係

寄主體侵入竝ニ病勢進展共ニ攝氏二五—二八度ニ於テ最モ良好ナリ。

(2) 稻ノ生育溫度ト抵抗性トノ關係

溫度ト感受性トハ逆比的ニシテ、高溫ニ於テ生育セル苗程抵抗性大ナリ。此現象ハ一、二兩期作間ノ流行性ノ差ノ重要原因ナリ。猶此現象ノ原因ニ就キテモ實驗結果ヲ得タリ。

(3) 稻ノ生育期(苗齡)ト抵抗性トノ關係

葉稻熱病ニ對シテハ稚苗ハ非罹病性ナルモ挿秧期ヨリ分蘖期ニカケテ罹病性トナリ、分蘖盛期ヨリ抵抗性ノ度ヲ增加シ、穗孕、出穗、登熟各期ハ極メテ抵抗性ナリ。穗稻熱病ニ對シテハ出穗前後ノ短期間感受性ニシテ、爾後日ヲ經ルニ從ヒ抵抗性ノ度ヲ增加ス。猶以上ノ現象ノ原因ニ就キテモ結果ヲ得タリ。

以上三要素ノ複合ニヨリ東亞ノ流行型式ハ次ノ四範疇ニ隸屬セシメ得。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

流行型	制約要素	流行地域
温帯型	(一)	北日本
暖帯型	(一)、(二)	南日本
亞熱帯型	(一)、(二)、(三)	臺灣、南支
熱帯型	(三)	南方熱帯域

流行機構ヲ以上ノ如ク理解スル事ニヨリ亞熱帯ニ於ケル稲熱病ノ防除法ハ、温帯ニ於ケルト其趣ヲ異ニセザルベカラザルヲ知ル。

(二) 稲菌核病(小黒)ニ關スル試験

(1) 品種抵抗性

a 本場ニ於ケル試験成績(省略)

b 新高試験地ニ於ケル調査(二期作)

品種名	被害程度
臺北七號	+
臺中一五〇號	+++
臺中一五二號	++
臺中一五三號	+
臺中一五四號	+
臺中一五五號	++

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

嘉農育二五七四	卌
嘉南二號	±
高雄一一號(最強)	−

(2) 肥料ト罹病度(新高試驗地ニ於ケル調査、二期作)

試驗區	罹病度
無要素	−
三要素少量	−
三要素多量	±
三要素最多量	卄
無窒素	−
窒素少量	−
窒素多量	+
窒素最多量	卄
無燐酸	+
燐酸少量	+
燐酸多量	卄
無加里	卄
加里少量	卄

(3) 防除ニ關スル試驗

a 草木灰、消石灰ノ施用ハ稻ノ抵抗性ヲ少シク增加セリ。

b 被害大ナルハ莖稈ノ各部位每ニ菌核形成狀況ヲ調査セルニ、下部ヨリ數ヘテ第一節一〇・六％、第二節五七・四％、第三節四六・八％、第四節八・五％、第五節以上〇％ノ形成率ヲ示セリ。稈長平均九三糎ノ場合ハ基部ヨリ平均二九糎、最大四六糎ノ高サノ部位迄菌核ノ形成ヲ認メタリ。從ツテ極メテ低刈トスルトキハ圃場ニ於ケル菌核ノ殘存數ヲ減少セシメ得ルモ、刈藁ノ處分適切ナラザレバ有効ナラズ。

此事ハ別ニ施行セル螟蟲ノ稈内分布狀況ノ調査ニ於テモ同樣ナリキ。

(ホ) 稻馬鹿苗病ノ發生ト環境トノ關係（省略）

(ヘ) 浮塵子ノ注油驅除時期試驗

浮塵子ノ發生少ク、明確ナル結果ヲ得ザリシモ過去ノ發生狀況ヨリシテ、臺中ニ於テハ八月上・中旬及ビ九月中旬ノ二回大發生ノ傾向アリ、稀ニ十月登熟期ニ大發生スル事ヲ確メタリ。故ニ實際的ノ防除ハ前二回ノ發生期ニ施行スベキモノナラム。

(ト) 莖腐彌地ニ關スル試驗

莖腐ノ彌地ハ主トシテ青枯病ニヨルモ、猶化學的原因ニヨルモノアルヲ確メ、更ニ青枯病抵抗性品種ヲ作出セリ。

二、昭和十八年度ニ於ケル病害蟲發生狀況

（イ）一期作

苗代ニ於テ腐敗病稍々著シカリシモ、本田生育中ハ一般ニ病害蟲ノ發生少シ。稻熱病ノ流行狀況ハ別紙ノ通リ。

北斗、彰化郡下ニ於テ甘蔗收穫遲延ノタメ適期挿秧ヲ爲サザリシ地帶ニ螟蟲ノ發生甚シキモノアリタリ。

東勢郡下、大甲溪岸山脚地帶ニ乳熟期ニ「クモカメムシ」ノ大發生アリ。尙多收穫ヲ目的トセル多肥田ニハ菌核病ノ發生アリ。又旱害ハ相當大面積ニ亘リタリ。

（ロ）二期作

彰化郡、大甲郡ニ八月下旬ヨリ「イネトゲトゲ」發生セルモ暫時ノ後消滅セリ。

北斗郡下ノ排水不良地帶ニ分蘖期ニ生理的障害ヲ認メタリ。

東勢郡下、能高郡埔里街牛眠山方面ニ「クモカメムシ」ノ大發生アリ。

新高郡、豐原郡ノ一部ニ菌核病ノ被害アリタリ。

旱害ハ相當面積ニ亘リ、又出穗後ノ季節風ニヨリ風害ヲ蒙レリ。尙本年ハ病蟲害ヨリ水害ノ方ガ被害大ナリキ。

（ハ）其他

菜豆ニ「インゲンモグリバヘ」ノ發生ヲ見タリ。

三、昭和十九年度事業計畫

（イ）稻熱病防除水滴除去試驗

（ロ）稻熱病ノ流行ニ關スル基礎實驗

（ハ）稻菌核病防除試驗

農業部農業試驗所

（ニ）稻馬鹿苗病ノ發生ト品種竝ニ溫度トノ關係試驗
（ホ）浮塵子注油驅除時期試驗
（ヘ）「タイワンクモヘリカメムシ」藥劑撒布驅除試驗
（ト）彌地ニ關スル調査研究
（チ）小麥ノ病害ニ關スル調査

臺南州立農事試驗場

一、昭和十八年度事業成績

病害ノ部

（イ）稻熱病抵抗性品種查定試驗

本年度ハ乾燥續キノ爲葉稻熱病ノ發生ヲ見ズ。出穗期ニ入リ降雨アリテ穗頸稻熱病僅カニ發生セリ。其中稍々多カリシモノハ嘉南一號、嘉南五號、嘉南Ｇ二號、嘉南二號、臺中六五號、嘉南八號等順次輕微ナリキ。

（ロ）稻熱病防除試驗

葉稻熱病ハ前試驗同樣發生ナク、出穗期ニ入リ三月二十五日植ノモノニ被害多ク、三月十日植是ニ次ギ、三月二十五日植最モ輕微ナリキ。肥料關係ニテハ二倍施肥料區ハ標準施肥量區ヨリ被害多ク、品種別ニテハ臺中六五號被害多ク、嘉南二號是ニ次ギ、嘉南八號ハ最モ輕微ナリキ。

（ハ）棉ノ病害防除試驗

種子消毒ニテハ「ウスプルン」ハ効果アルモノ、如ク、冷水温湯浸法及ビ無消毒ハ差ナカリキ。

藥劑防除ニテハ「ボルドウ」撒布區稍々被害輕ク、次ニ王銅區、「サンボルドウ」區、「活性ボルドウ」區ニシテ、無撒布區ハ被害多カリキ。目下試驗中ニテ收量ハ未定ナリ。

害蟲ノ部

（イ）棉ノ害蟲效力比較試驗

藥劑效力比較試驗

「デリス劑」撒布區　市販製品、當場產共ニ棉ノ生育旺盛ニシテ、除蟲菊劑ニ比シ收量多キモノ、如シ。未ダ收穫完了セズ、續行中。

抵抗性品種查定試驗

陸地棉ニテハ何レノ優良品種ト雖モ「フタテンコミドリヨコバヒ」ノ被害ヲ受ク。特ニ本試驗ニアリテハ附近ニ「アンバリヘンプ」ヲ植栽セルタメ、是ニ「ヨコバヒ」ノ發生著シク、大發生ニヨリ被害ヲ蒙リタルモノ多ク、殆ド無收穫ナリ。此等ニ對シテハ從ツテ藥劑撒布ヲ行ハザレバ收穫ヲ得ルハ困難ナリ。本蟲ニ對シ特ニ抵抗性弱キモノハ五品種アリ。供試品種中、臺農八號、同七號、同六號、「ズラフブ」、「カハシドワアップランド」等ハ差ナク比較的強ク、「キャンボヂヤ」ハ稍々劣リ、其他ハ著シク劣レルモノ、如シ。收穫中ニテ未ダ完了ニ至ラズ。

調查ノ部

誘蛾燈ニヨル一點大螟蛾驅除豫防ニ關スル調查

本年ハ例年ノ如キ傾向ヲ示サズシテ（九月中旬——十月上旬最モ多ク發生ス）七月最モ誘殺蛾多ク、三月是ニ次ギ

五月、六月、九月ノ順序ニ順次誘殺蛾ハ減少セリ。

二、昭和十八年度ニ於ケル病害蟲發生狀況

作物名	發生月日	病蟲名	地名
米	六月下旬ヨリ七月下旬ニ亙ル	一點大螟蛾	臺南
	七月	セジロウンカ	同
	九月	セジロウンカ、トビイロウンカ、但シ被害率ハ輕微ナリキ	同
黄麻	七月中旬	ヒメアカキリバ（藥劑驅除）	同
	同	病害（莖ニ黑點ヲ生ジ縱ニ裂割スルモノアリ）	同
棉	八月上旬、八月下旬、九月上旬	フタテンコミドリヨコバヒ、發生多シ	同

（イ）本年比較的發生多カリシ害蟲ト時期

作物名	害蟲名	時期	地名
稻	一點大螟蛾	例年嘉義ニ於テハ二期作ニ多ク發生スルモ今年ハ一期作ニ多ク六月及ビ七月ニ最モ多シ	臺南
同	浮塵子	一期作 七月多 二期作 九月少	同
檬果	マンゴウタマバヘ	五月、六月	同
大根、白菜等	ハイマダラノメイガ	十月、十一月	同

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

（ロ）本年比較的發生少ナカリシ病害蟲

作物名	害蟲名	時期	地名
棉	コアカキリバ		臺南
	棉野螟蛾		同
	アカホシカメムシ		同
	ワタノアカミムシ		同

三、昭和十九年度事業計畫

（イ）水稻稻熱病抵抗性査定試驗　繼續

（ロ）水稻稻熱病防除試驗　同

（ハ）棉ノ病害防除試驗（種子消毒）（藥劑撒布）　同

（ニ）甘藷ノ縮芽病防除試驗　同

（ホ）一點大螟蛾防除試驗　新規（豫備試驗）

（ヘ）同　逃避栽培試驗　同（同　）

附　誘蛾燈ノ研究

（ト）「アリモドキザウムシ」防除試驗　新規（豫備試驗）

（チ）棉ノ浮塵子防除試驗　同（同　）

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

（リ）「デリス劑」效力比較試驗（蔬菜）　繼續
（ヌ）誘蛾燈ニヨル螟蛾驅除豫防ニ關スル調査　同
（ル）甘藷野螟蛾ノ被害調査　同
（ヲ）「クリプト瓢蟲」飼育並ニ放飼　同
（ワ）「ラック介殼蟲」ノ飼育　同

高雄州立農事試驗場

一、昭和十八年度事業成績

（イ）蓖麻蠶ノ食草ニ就キ調査ヲ試ミタルニ印度菩提樹（四〇％）、カカオ樹（五％）、榕樹（五％）及ビ「キヤッサバ」（五％）等ノ葉ハ幼蟲ガ孵化シテヨリ上蔟ニ至ル迄各々其飼料トナシ得ルモ成績極メテ不良ニシテ到底實用的價値ナキモノト認メラル。尙蓖麻蠶ハ野外ニ於テ自然的大蕃殖ヲナスガ如キ事ハ其幼蠶ノ性狀ヨリ見テ到底不可能ナルガ如シ。

（ロ）「ラック介殼蟲」ハ茘枝ニ養殖シテ相當優良ナル成績ヲ擧ゲ來レルモ寄生蜂ノ發生ニヨリ全滅スルニ至レリ。鳳凰木ニヨル飼育ハ種付初期ハ成績佳良ナルモ、漸次不良トナリ絕滅スルニ至ル。

（ハ）水稻小黑菌核病防除ノ目的ヲ以テ三要素中、窒素質肥料、卽チ硫安ヲ用ヒタルモノト、石灰窒素ヲ用ヒタルモノト二區ニ分チテ試驗セルニ、石灰窒素區ハ硫安區ヨリ却ツテ罹病多キヲ示シ籾ノ收量モ少ク、從ツテ石灰窒素ノ施用ハ菌核病ノ防除ニ何等効果ナキモノト思料セラレタリ。尙本試驗ハ前年度ト同樣ナル結果ヲ示セリ。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

品種ニ就テハ臺中六五號ノ方ガ高雄一〇號ニ比シ罹病率高キ傾向アリ。

二、昭和十八年度ニ於ケル病害蟲發生狀況

（イ）水稻ニ於ケル一點大螟蛾ノ發生ハ第一期作、第二期作ヲ通ジ概シテ輕微ナリキ。

（ロ）八、九月旗山郡下ノ苧麻ニ「フクラスヾメ」ノ發生アリ、被害程度ハ相當甚大ナリシガ如シ。

（ハ）屛東市內ノ行路樹ノ「タガヤサン」ニハ年々夏季ニ於テ「ウスキシロテフ」、「ウスキテフ」ノ大發生アリテ殆ド一葉ヲモ止メザルニ至ルヲ常トス。又十月、十一月ノ候ニ於テハ「ムラサキクチバ」ガ同樣行路樹ノ鳳凰木ニ大發生シ全葉ガ喰害サレ、恰モ落葉セルガ如キ觀ヲ呈ス。然レ共是ガ爲該行路樹ノ樹勢ガ特ニ衰弱スルガ如キ事ナク、軈テ新葉ヲ生ズルニ至ル。

（ニ）本年第一期作水稻ハ高溫ニヨルモノカ稻熱病ノ發生極メテ輕微ニシテ、品種又ハ肥料ノ多寡ニヨル被害程度ノ差異ヲ認メザリキ。

（ホ）八月中旬既ニ成熟期ニ達セル黄麻園ヲミルニ炭疽病ハ例年ニ比シ發生甚ダ少ク、是ニ反シ根腐病ハ激甚ニシテ、殊ニ新豐青皮、臺中白烟、白露等ハ全區殆ド青葉ナク、僅カニ深紅皮、爪哇青皮、「チンスログリーン」等ガ比較的ニ抵抗性ナルヲ認メタリ。

質　疑

（山保技手）「アリモドキザウムシ」ノ防除法

圃場ニ於ケル防除法トシテ適當ナルモノアレバ承リ度シ。

（三輪技師）新營ノ生藥會社鎭目氏ノ言ニ依レバ「コカ」ノ絞糟ヲ甘藷ノ肥料トシテ百姓ニ給與セシ所、該蟲ノ防除ニモナ

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE

ルトテ需要盛ナリトノ話アリ。是ガ效果ハ未調査ナルモ一應試ミラレテハ如何。其他施肥料ト驅蟲トヲ兼ネタルモノナキヤ目下研究中ナリ。

（山保技手）　螟卵寄生蜂寄生歩合調査

採取セル螟卵ガ產卵セラレテ後幾日ヲ經過セルモノナルヤヲ明カニスルニ非ザレバ、調査ノ效果ハ甚ダ少キモノト思料セラル、ガ如何。

（三輪技師）　實際ノ寄生歩合ハ圃場ニテ適宜採卵セル資料ニテハ不確實ナルモ、其地區ノ一定ノ時期ノ凡ソノ目安ハ得ラレルト思ハル。

臺灣總督府農業試驗所病理昆蟲科昆蟲係

一、昭和十八年度事業成績

（一）稻作害蟲ニ關スル事項

（イ）白穗中ニ於ケル螟蟲ノ位置ノ調査

第二期作收穫時期ニ於ケル白穗中ノ螟蟲ノ潜伏位置ニ就キ調査セリ。

調査部位（地際ヨリノ長サ）	蟲數	步合	莖ノ位置乃至狀態
根部ヨリ三糎	六一九	八八・四三	地中
三―六糎	三九	五・二八	地上（低刈）
六―二八糎	四二	六・〇〇	同（高刈）
二八―三〇糎	二	〇・二八	同（刈藁）
計	七〇〇		

農業部農業試驗所
TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE

右ノ結果ハ當試驗所ノ十八年度十一月下旬ニ於ケル越冬幼蟲ハ殆ド地下莖中ニ既ニ潜入セルヲ示セリ。

（ロ）刈株ノ浸水ニヨル螟蟲驅除試驗

「ポット」ニヨリテ試驗シタルモノニシテ、刈株ノ長サヲ地表五分及ビ五寸ノ二種トシ、是ヲ横位、逆位、正位ノ三狀態ニ置キ、日數ハ一日、二日、三日、五日、七日、一〇日ニ分ケテ調査セリ。尙供試被害株ハ各二〇株ヲ使用セリ。

結果　一—三日ノ區ハ孰レモ假死ノ狀態ニアリ、是ヲ取出シ放置スルト二、三〇分乃至三時間ニシテ全部ガ蘇生セリ。五日ノ區ハ約五〇%ガ斃死シ、七—一〇日ノ區ハ全部死滅セリ。

（ハ）螟蟲ノ水漬試驗

幼蟲ヲ莖ヨリ取出シ布ニテ包ミ水中ニ漬ケ一定時間放置シタル後取出シ、吸取紙上ニ置キ其死滅程度ヲ調査セリ。

結果　二〇—二四時間ノモノハ全部蘇生セリ。二八時間浸漬ノモノハ四頭蘇生、六頭斃死シ、四〇時間ノモノハ五頭蘇生、八頭斃死シ、七二時間ノモノハ二頭蘇生シ八頭ハ斃死セリ。

（ニ）螟蟲寄生蜂ノ寄生歩合並ニ其種類調査

一點大螟蛾ノ卵塊ニ寄生スル卵寄生蜂ノ寄生歩合及ビ其種類ニ就キ全島ニ亙リ調査セリ。寄生歩合ノ調査ハ次ノ二法ニヨレリ。

（A）　$寄生率 = \frac{羽化寄生蜂數}{孵化螟蟲數 + 羽化寄生蜂數}$

(B) 寄生率＝$\dfrac{\text{羽化寄生蜂數}+\text{不羽化寄生蜂數}}{\text{孵化螟蟲數}+\text{不孵化螟蟲數}+\text{羽化寄生蜂數}+\text{不羽化寄生蜂數}}$

結果(A)式ニテハ全島平均四二・四四％(B)式ニヨレバ五六・〇五％トナリ、(A)式ニ於テ高率ノモノハ六三・七二％、(B)式ニテハ六八・八三％ヲ示セリ。寄生蜂ノ種類ヲ掲グレバ次ノ如シ。

1. Telenomus rowani (GAHAN) ハラナガクロタマゴバチ
2. Telenomus dignus (GAHAN) スヂクロタマゴバチ
3. Telenomus sp. キイロタマゴバチ
4. Trichogramma japonicum ASHMEAD ズヰムシアカタマゴバチ
5. Tetrastichus schoenobii FERRIÈRE ズヰムシルリタマゴバチ

以上ノ中寄生率ノ最モ高キ黑卵蜂(「ハラナガクロタマゴバチ」及ビ「スヂクロタマゴバチ」ノ區別ハ極メテ困難ナリ)ニシテ次位ハ「ズヰムシアカタマゴバチ」ナリキ。

(ホ) 水稻ヲ害スル蟹ノ種類ノ調査

海南島及ビ佛印ニ於テハ蟹ノ害ハ甚大ナルモ、臺灣ニ於テハ海水ノ侵入スル海岸附近ノ水田ニ於テノミ加害ヲ受ク。臺北州羅東郡五結庄清水ニ於ケル是ガ調査結果ヲ左ニ掲グ。(三宅貞祥氏ニヨル)

1. Chasmagnathus convexus DE HAAN ハマガニ(ハマガニモドキ)
2. Helice tridens DE HAAN アシハラガニ(ハマガニ)ノ1種
3. Sesarma dehaani H. MILNE-EDWARDS カクレガニ(ベンケイモドキ)

(ヘ) 「ハスモンヨタウ」ノ喰害調査

農業部農業試驗所 1895 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE

本種ガ水表ニ浮游スル塵芥、其他水草上ヲ歩行シ水稲ノ葉ヲ喰害スルヲ認メタリ。尙實驗室ニ於テ清水ヲ使用シ歩行ノ可否ヲ試驗シタル處直チニ沈下シ溺死セリ。

(ト) 第一期作ニ異常發生セル「コブノメイガ」調査

十八年度第一期作收穫期ニ臺北市附近及ビ新竹州ニ本種ガ多數發生セリ。第二期作ニ大發生ヲ豫想シタルニ孰レモ大發生スルニ至ラズ終熄セリ。其原因ニ就テハ不明ナルモ興味アル現象ナリト認メラル。

(二) 屋內害蟲ニ關スル事項

(イ) 皮革ニ對スル「モウセンガ」ノ加害

「モウセンガ」ハ世界共通種ナルニ拘ラズ從來臺灣ニ於ケル確實ナル分布記錄ガ無カリシガ、近來皮革ニ著シク發生ヲ見ルニ至レリ。目下「ハラジロカツヲブシムシ」ト共ニ飼育中ナリ。

(ロ) 竹製品ニ對スル「チビタケナガキクヒムシ」ノ防除

臺灣ヨリ下駄表トシテ竹材ヲ日本內地ニ移出スル際、輸送途中ニ於テ「チビタケナガキクヒムシ」ノ加害ヲ蒙リ大部分ハ商品價値ヲ失フニ至ル。

是ガ豫防法トシテ竹材ニ亞砒酸「ソーダ」液ヲ使用シタル處大ナル効果ヲ收メタリ。

(三) 家畜害蟲ニ關スル事項

(イ) 恒春支所ニ於テ牛馬ニ寄生吸血スル虻ノ種類　恒春支所ニ於テ牛ニ寄生吸血スル虻ニ就テ調査セルニ次ノ五種アルヲ知レリ。就中「タイワンシロスネアブ」ハ甚ダ稀ナル種類ニ屬ス。

1. Tabanus pallidepectaratus BIGNOT タイワンアカウシアブ

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

2. Tabanus exoticus RICARDO タイワンウシアブ

3. Tabanus amaeus WALKER タイワンシロフアブ

4. Tabanus sanguineus WALKER タイワンシロスネアブ

5. Tabanus bivittatus MATSUMURA フタスヂアブ

（ロ）「ベッヂイキンバヘ」土着ノ決定

恒春其他高雄州下及ビ臺東廳ニ於テ蛆病ヲ起ス「キンバヘ」ハ「ベッヂイキンバヘ」ニシテ、上記地方ニ於テハ水牛ノ鼻腔ニ加害スルヲ認メタリ。

（ハ）「クヌギカレハ」ノ牧野ニ對スル注意

日本内地ニ於テ放牧セル牛馬ガ「クヌギカレハ」ノ毒毛ノ害ヲ蒙ルモノ多シト云フ。本島ニ於テモ山地帶ニ本害蟲ガ棲息スルヲ以テ留意スルヲ要ス。

農業部農業試驗所 1895 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE

（四）土中害蟲ニ關スル事項

（イ）地下ニ埋沒セル鉛被電話線ノ蟲害

國際電氣通信會社附設ノ地下埋沒鉛被電話線（ケーブル）ガ白蟻ノ害ニヨリ故障ヲ生ジタリ。果シテ白蟻ガ鉛管ヲ食破リ「ケーブル」ニ侵入シタルモノナリヤ否ヤ、或ハ又製造當初ヨリアリタル小孔ヨリ破壞侵入シタルモノナリヤニ就テハ目下研究試驗中ナルモ、「イヘシロアリ」ガ鉛管內ニ侵入加害スル事實竝ニ「ヤマトシロアリ」ガ鉛管上側ニ通路ヲ設ケ棲息スル事實ヲ認メタリ。

（五）其他ノ事項

（イ）各種作物ニ就キ調査決定シタル新害蟲ハ既ニ臺灣害蟲名彙ニ集錄セリ。

農用藥劑ニ關スル各種試驗ハ未了ニ就キ何レ取纒メノ上報告ス。

（ロ）本年度内ニ發表シタル調査並ニ研究報告ハ次ノ如シ。

臺灣害蟲名彙

農用藥劑彙集

規那樹害蟲調査（彙報二一六號）

茶樹害蟲調査報告（報告第八四號）

其他・臺灣博物學會々報及ビ臺灣農事報ニ數篇ヲ發表シタリ。

（ハ）講習會及ビ農業錬成所講義

府及ビ各州廳技術員指導講習會及ビ農業錬成所ノ講師トシテ病害蟲ニ關シ夫々分擔講義ヲ行ヘリ。

臺灣總督府農業試驗所病理係

一、昭和十八年度事業成績

（イ）稻熱病防除試驗成績概要（協同試驗成績表參照）

（ロ）堆肥施用ト稻熱病トノ關係調査成績概要

前年度同樣堆肥單用區、金肥單用區、堆肥金肥混用區ヲ設ケ各區ノ稻熱病罹病狀態ヲ調査セルニ、堆肥單用區ニ於ケル施用量ノ增加ニ伴フ各部位稻熱病ノ罹病率ノ增加程度ハ金肥單用區ニ比シ極メテ低度ナルモ、堆肥金肥混用區

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE

ニ於テハ金肥單用區同樣施用量ノ增加ニ比例シ稻熱病ノ罹病程度モ高度ニ增大スル傾向ヲ示セリ。

（ハ）藥劑施用ト稻熱病トノ關係調査成績概要

沃度加里、「珪酸ソーダ」、硫酸銅、石灰、藁灰、石灰窒素ヲ本田ニ施用シ稻熱病ノ罹病程度ヲ調査セリ。本年度ニ於ケル稻熱病ノ發生ハ全般的ニ輕微ナリシ爲、各區ノ稻熱病罹病程度ノ差異ヲ認メル事ヲ得ザリキ。

（ニ）黃麻ノ炭疽病ニ關スル調査成績概要

(1) 品種トノ關係

本年度ニ於ケル炭疽病ノ發生被害ハ全般的ニ輕少ナリキ。本島內ニ廣ク栽培サレツ、アル品種中、比較的ニ抵抗性強キハ新豐青皮、次デ白露ニシテ、抵抗性弱キハ淡紅皮、臺中白烟脂及ビ「ハルマヘラ五號」ナリ。長莢種ハ殆ンド罹病セザルガ如シ。長莢種中ノ「チンスローグリン」ニ一見炭疽病類似ノ病害發生セルモ檢鏡培養ノ結果炭疽病ニ非ザル事ヲ知レリ。病原ニ就テハ目下調査中ナリ。

(2) 窒素施用量ト發病トノ關係

本病ハ窒素施用ニヨリ急激ニ增加シ、無窒素區一四%ノ罹病率ニ對シ窒素少量區八八%、窒素中量區ニ於テ一〇〇%ニ增加ス。

(3) 播種期對栽植密度ト發病トノ關係

本年度ニ於テハ四月二十日ヨリ二〇日置キニ播種セリ。其被害狀態ハ播種期ノ遲レルニ從ヒ罹病率少キ傾向ヲ示シ、栽植密度ハ播種期ノ如何ニ不拘栽植密度粗ナルニ從ヒ罹病率大ナル傾向ヲ示セリ。

二、昭和十八年度ニ於ケル病害發生狀況

前述ノ如ク本年度ニ於ケル主要作物ノ病害發生ハ例年ニ比シ極メテ輕少ナリキ。

十一月九日播種ノ亞麻ニ十一月二十五日以降炭疽病發生シ、幼苗ノ枯死セルモノヲ相當多ク認メタリ。

小麥ハ十月八日播種セルモノ現在出穗初ニシテ、赤黴病ハ漸ク發生ヲ見ルニ至リタル狀態ナリ。

嘉義支所

昭和十八年度事業成績

（イ）一般害蟲及ビ益蟲ノ調査

一般農作物及ビ果樹ニ加害スル昆蟲ノ繼續調査トシテ、當場内外デ栽培セル各種農作物ノ生育、各期ニ於ケル害蟲ノ種類及ビ食性ノ狀況ニ就キ調査セルニ害蟲二三種、益蟲四種ヲ得タリ。

（ロ）「セジロウンカ」ニ關スル調査

先ヅ基本調査トシテ昨年度ノ調査ニ引續キ苗代、畦畔ニ於ケル「ヨコバヒ」及ビ「ウンカ」兩科ニ屬スル種類及ビ棲息狀況ニ就キ調査セリ。其成績ハ「ヨコバヒ」科六種、「ウンカ」科四種合計一〇種アリタリ。猶本年度發生セル臺南地方ニ於ケル「ウンカ」ノ冬期ニ於ケル棲息狀態ニ就キ調査スル計畫ナリ。

（ハ）甘蔗野螟蛾ノ調査

本調査ハ昭和十七年度ヲ以テ協同調査ヲ取止メタルモ、當場トシテハ猶追及シ本年度ハ水耕法ニ依ル本蟲ノ加害狀況ト塊根形成機構ニ關スル觀察又ハ各季節ニ於ケル（九月、十月、十二月、二月）本蟲ノ加害狀況ニ就キ調査ヲ實施中ナリ。

（ニ）棉各種ニ於ケル「フタテンコミドリヨコバヒ」ノ加害狀況

成熟期ヲ異ニスル棉各品種及ビ臺南、臺中、當場ノ撰出育成品種合計一五種ニ就キ調査セリ。其抵抗性ハ大體早生種ガ弱ク、晩生種殊ニ「カンボチヤ種」ハ本蟲ニ對シ最モ强力ナルモノ、如シ。

又各試驗場ニ於テ撰出ノ育成品種ニ於テモ同樣ナリ。支所ニ於テ育成セルモノ、即チ「カンボチヤ」ヲ母體トシテ「エキスプレス」、「デルフォス」、「エクセルシヤ」及ビ「ノーザンスター」ノ各品種ヲ配合シタル育成種ハ何レモ他品種ニ比較シ强ク、殊ニ臺農六號種ニ於テハ本蟲ニ對シ最モ强ク、今日迄ノ收量狀態最モ優レルヲ認ム。

(ホ) 「ワタノアカミムシ」及ビ「クサオビリンガ」ノ趨光性ニ關スル試驗

棉花會社圃場ニ於テ觀察セル期間ハ僅カ一箇月間ナリシモ「ワタノアカミムシ」ノ燈火ニ飛來スル步合ハ比較的少ク二—七四、「クサオビリンガ」ニ於テハ一〇—二五四、其他金龜子類ガ多數來集スルヲ認メタリ。

猶兩種害蟲ノ圃場ニ於ケル發生狀態ヨリ考察スルニ「ワタノアカミムシ」ニ於テハ燈火ニ誘引セラルヽ步合ハ甚ダ少ク「クサオビリンガ」ニ於テハ稍々良好ナリ。

(ヘ) 「サボヂラ」及ビ「アボカード」兩果實ト「ミカンコミバヘ」

「サボヂラ」果實ニ對スル「ミカンコミバヘ」トノ關係調査ハ前年度ニ於テ概略ノ調査ヲ終リ、本年度ハ調査不充分ノモノニ就キ調査ヲ續行中ナリ。

又「アボカード」果實ニ就テハ、調査ヲ要スル項目二、三アルモ本樹果實ノ僅少ナル爲調査ヲ中止シ、本年度ニ於テハ地方試作園果實ニテ調査セントス。

(ト) 驅除試驗

(1) 「ワタノアカミムシ」ノ喰入防止試驗

「デリス」、除蟲菊及ビ今津ノ各藥劑ヲ供用シ試驗セリ。其結果本蟲ノ喰入步合ハ二九—四二%ナルニ對シ、無

撒布區ハ六四%ニシテ、其中「デリス劑」ノ撒布ハ稍々優レリ。

(2) 「フタテンコミドリヨコバヒ」及ビ「クサオビリンガ」防除試驗

「デリス」、除蟲菊、砒酸鉛、砒酸石灰、煙草粉、砒酸鉛加用「ボルドウ液」ノ各劑ニ就キ試驗セリ。其結果「クサオビリンガ」ノ產卵ハ除蟲菊及ビ煙草粉ノ撒布區ニ於テ效果良好ニシテ、幼蟲ノ喰害ハ砒酸石灰及ビ「デリス劑」ニテ可ナリ。

又「フタテンコミドリヨコバヒ」ニ就テハ、收穫途上ニシテ不明ナレドモ、藥劑撒布後ニ於ケル本蟲ノ寄着狀態ハ少ナク、又「デリス」及ビ除蟲菊乳劑撒布區ハ最モ少シ。

(チ) 販賣驅蟲劑ニ關スル試驗

前年度ヨリノ繼續事業ニシテ本年度ハ蔬菜ノ各種害蟲ニ就キ試驗スベク各種ノ蔬菜ヲ播種シ、害蟲發生ノ都度砒素劑ノ效力ヲ查定セントシ計畫實施中ナリ。

(リ) 「ミカンコミバヘ」誘引ニ關スル研究

本年度ハ施行セズ。

(ヌ) 有用昆蟲ニ關スル研究

「ラック介殼蟲」ヲ喰害スル敵蟲ニ就テ目下ノ所判名セルモノハ、蛾類一種、寄生蜂二種ニシテ、當地方ニ於ケル養殖ハ頗ル困難ノ狀態ニアリ。敵蟲トシテノ夜蛾科ニ屬スル蛾ハ一世代ノ所要日數長日ニ亘ルモノニシテ、「ラック」採集後最長ハ七二日後ニ羽化スルモノアリ、猶本種ノ幼蟲ニハ二次寄生蜂(黃色小蜂二分ノ一大ノ大キサ)ノ寄生ニ依リ斃死スルモノ年々增加スル傾向ニアリ。此寄生蜂ノ幼蟲寄生步合ハ八月ノ調查ニ於テハ、二九―三二%ナリ。一幼蟲ニ對シ平均九・二匹ナリ。猶寄生ハ老齡ノモノニ多シ。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE

又黄色小蜂ハ夏期調査ニ於テ一世代ノ日數、二八日—三二日間ヲ要シ、硝子飼育ニ依ル生存日數ハ平均二八・五日間ナリ。

鳳山支所

一、昭和十八年度事業成績

害蟲ノ部

(イ) 茄ノ「ヨコバヒ」ノ生態竝ニ防除試驗

(1) 生態

該蟲ノ卵ノ發育竝ニ同幼蟲ヲ生長ノ異ツタ茄葉デ飼育シタ結果ヲ數量的ニ調査シテ生長係數ヲ算定シ、且茄株ノ各部ニ於ケル微細氣候ノ測定ヲナシ、ソレラノ結果カラ該蟲ノ寄主上ニ於ケル分布ノ異ナル原因ヲ明カニセリ。

(2) 防除試驗

幼蟲ノ各齢期及ビ成蟲ニ對スル藥劑ノ効果ヲ各種ノ展着劑、硫酸「ニコチン」、除蟲菊乳劑、石灰「ボルドウ」液等ニ就キ檢討シ、ソレラ藥劑ノ該蟲ニ對スル最低致死量ノ決定ヲナセリ。

(ロ) 鳳梨粉介殼蟲及ビ「赤ダニ」ノ生態

急性萎凋病及ビ慢性萎凋病株ニ於ケル粉介殼蟲、「赤ダニ」ノ分布ヲ各病徴別ニ調査シ、兩病株ニ於ケル上記害蟲ノ分布及ビ病株ノ根ノ枯死率、綠點數等ガ夫々異ナレル樣相ヲ示スコトヲ明カニスルト共ニ、併セテ左記事項ノ調査ヲモナセリ。

農業部農業試驗所 1895

(1) 粉介殼蟲ノ一株中ニ於ケル分布型ノ決定

(2) 病徵別一株中ニ於ケル「赤ダニ」ノ分布

(3) 各病株ノ繁殖體ニ於ケル蟲ノ分布

(4) 鳳梨品種ト綠點數トノ關係

(5) 綠點數ト根ノ枯死率トノ關係

（ハ）鳳梨粉介殼蟲及ビ「赤ダニ」ノ防除試驗

(1) 從來使用サレツ、アル粉介殼蟲ノ驅除劑ノ再檢討ヲ行フト共ニ、新ニ煙草粉木灰ノ効果ヲ實生苗及ビ裔芽內棲息ノ該蟲ニ就テ檢討シ、同劑ガ他劑ニ比シテ有力ナルヲ認メタリ。

(2) 青酸燻蒸ニ依ル粉介殼蟲及ビ「赤ダニ」ノ死亡率ヲ檢シ、燻蒸ニ代ル浸水ノ該蟲ニ對スル影響ヲ調査セリ。

（ニ）「ハイマダラノメイガ」ノ生態竝ニ防除試驗

(1) 生態調査　左記事項ニ就キ檢討セリ。

a 大根ト白菜ニ於ケル被害率

b 產卵時刻ノ調査

c 寄主ノ大サニ依ル產卵數ノ變異

d 寄主ノ大サニ依ル產卵場所ノ變異

(2) 藥劑試驗（產卵忌避試驗）

九種ノ藥劑及ビ一種ノ雜草ニヨル產卵忌避試驗ヲ行ヒ、ソレラノ藥劑ガ何レモ無處理ニ較ベテ產卵忌避効果ヲ有スルモノ、知ク認メタルモ、試驗開始時ニ於ケル該蟲發生數尠キタメ、忌避効果ノ比較判定ヲナシ得ザリキ。

尙次年度ニ繼續セントス。

（ホ）瓜實蠅ノ生態

仕立方ヲ異ニセル胡瓜三系統四〇品種ニ就キ、ソレラノ內ニ棲息スル該蟲ノ活動狀況ヲ比較調查スルト共ニ產卵調查ヲモ行ヒ、產卵數ハ品種ニヨリ差異アルヲ認メタリ。

病害ノ部

（イ）鳳梨萎凋病株ノ成育

病徵別病株ノ雨期、乾燥期ニ於ケル病狀ノ回復又ハ進步狀況ヲ數量的ニ表示スルト共ニ、病徵別吸芽萠出率、出穗未出穗ノ出現率及ビ收穫果實數ヲモ調查セリ。

（ロ）鳳梨目腐病ニ關スル調查

本年度ハ小果ノ成育調查ヲ行ヒ左記ノ成績ヲ得タリ。

(1) 開花日ト發病トノ關係

(2) 小果ノ成育調查

a 外部調查

b 內部調查

c 果實ノ各部ニ於ケル糖度ト生長トノ關係

（ハ）「バナナ」ノ病葉調查

（ニ）木瓜ノ藥劑試驗

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

二、昭和十九年度事業計畫

害蟲ノ部

（イ）茄ノ「ヨコバヒ」ノ生態竝ニ防除試驗

生態試驗（現在施行中）

(1) 東亞共榮圏内ノ茄品種一八ニ就キ該蟲ニ對スル抵抗性ヲ調査シ、併セテ品種間ニ於ケル抵抗性ノ原因ヲ究明セントス。

a 飼育試驗ニ代ル抵抗性査定
b 成、幼蟲分布ノ品種間差異
c 各品種間ニ於ケル産卵數調査
d 茄品種間ノ形態的差異
e 該蟲口器ノ長サヲ各齡期別ニ調査
f 品種間ノ生長程度ト該蟲ノ棲息密度トノ關係
g 茄ノ生長ニ伴フ葉溫、垂直溫度ノ品種間差異
h 各品種間ニ於ケル被害葉ノ調査

(2) 成蟲ノ活動時刻調査

(3) 時刻別成蟲ノ品種間分布調査

防除試驗

(1) 除蟲菊ノ最低致死藥量ノ決定

(2) 「デリス」ノ最低致死藥量ノ決定

(3) 「石灰ボルドウ液」ニ(1)、(2)ノ藥劑投入セル場合ノ最低致死藥量ノ決定

(4) 藥劑撒布時期及ビ時刻ノ決定

（ロ） 鳳梨萎凋病原因ノ分析

(1) 寄生粉介殼蟲類ト發病トノ關係

(2) 萎凋病發病程度ト粉介殼蟲、「赤ダニ」ノ存在トノ關係

(3) 粉介殼蟲ノ體液注射ニヨル發病ノ有無調査

(4) 移植、斷根、剪葉ト鳳梨ノ成育竝ニ萎凋病發生トノ關係

(5) 栽植時ニ於ケル灌水、表土ノ深淺ト萎凋病發生トノ關係

(6) 肥料ノ種類及ビ施肥時期ト萎凋病發生トノ關係

(7) 時期別藥劑撒布ト萎凋病發生トノ關係

(8) 綠點ノ形成、出現時期調査

（ハ） 「ハイマダラノメイガ」ノ生態竝ニ防除試驗

生態

(1) 產卵調査

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE

(2) 幼蟲ノ喰入調査

(3) 蛹ノ生態

(4) 發生消長調査

(5) 採種時期ニ於ケル該蟲ノ加害狀況調査

防除試驗

(1) 產卵忌避試驗

(2) 殺卵試驗

(3) 殺蟲試驗

(4) 採種時期ニ於ケル防除試驗

(二) 瓜實蠅ノ生態並ニ防除試驗

生態

(1) 臺灣南部ニ於ケル發生時期調査

(2) 同 最盛期調査

(3) 同 發生終了時期調査

(4) 產卵開始時期調査

(5) 飼育試驗

(6) 成蟲ノ活動時刻調査

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

(7) 産卵試驗

防除試驗

(1) 實蠅ノ加害ト播種期トノ關係

(2) 産卵忌避試驗

(3) 殺蟲試驗

病理關係ノ十九年度事業設計ハ加藤技手應召ノ爲是ヲ保留ス。

東部棉作指導所

昭和十八年度ニ於ケル害蟲發生狀況

(イ) 浮塵子ハ第二期作ニ發生セルモ（八月下旬）早期發見ニヨリ幼蟲期ニ驅除ヲ行ヒタル爲、被害ハ僅少ニテ防止シ得タリ。

「トビイロウンカ」ハ新港郡新港庄ニ發生シ、「セジロウンカ」ハ臺東街卑南庄、大麻里、關山ノ池上庄、新港郡新港、都蘭、長濱等ニ發生ヲ見タリ。

(ロ) 一期作四月上旬ニ新港郡高原、關山郡タコバン地方ニノミ泥負蟲ノ發生ヲ見タリ。

(ハ) 「コアヲヨタウ」ハ今年度ニ於テハ發生少ク、新港ニ於テ本田ニ僅カニ發生ヲ認メタルニ過ギズ。

(ニ) 「クモカメムシ」ハ新港郡下ノ山脚地帶ニ多數發生ヲ見、第一期作ニ於ケル該蟲ニ對シテハ捕蟲網ヲ以テ驅除セリ。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE

（ホ）臺東郡大麻里庄內大乘報恩會農場ノ「レモン」及ビ「グレープフルート」園ニ於テハ「ミカントゲカメムシ」ガ大發生シ、「グレープフルート」ノ如キハ十月下旬收穫前ニ既ニ是ガ被害ニヨリ收穫皆無ノ狀態トナレリ。

西部棉作指導所

昭和十八年度ニ於ケル害蟲發生狀況

（イ）「フタテンコミドリヨコバヒ」ニ對スル棉ノ品種ノ抵抗性ニ就テ見ルニ六―九月ニテハ臺農六號特ニ強ク、「エキセルシア」及ビ「エキスプレス」最モ弱キ傾向アルヲ認ム。

（ロ）黃麻ニ「ヒメアカキリバ」相當ニ發生スルヲミタリ。

協議事項

昭和十九年度協同試驗ニ關スル件

（イ）稻熱病防除試驗

本年度同樣各試驗場ニ於テ防除試驗計畫ヲ樹立シ施行ス。

（ロ）小麥ノ病害發生調査

出來得ル限リ是ヲ施行ス。

（ハ）黃麻炭疽病發生調査

十九年度ヨリ是ヲ中止ス。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

昭和十八年度稻熱病防除試驗成績

各州廳農事試驗場協同試驗

高雄州立農事試驗場

稻熱病防除試驗

目的

稻熱病ニ對シ種籾消毒竝ニ藥劑撒布ノ效果ヲ知ラントス。

試驗方法

(1) 供試品種　臺中六五號、高雄一〇號

(2) 試驗區竝ニ面積　一〇・四アール　一區制

(イ) 種籾「ウスプルン」消毒、生育中「ボルドウ液」二回撒布
(ロ) 同　同　三回撒布
(ハ) 同　無撒布
(ニ) 種籾無消毒　生育中「ボルドウ液」二回撒布
(ホ) 同　同　三回撒布
(ヘ) 同　無撒布

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

(3) 藥劑撒布

(イ) 撒布藥劑　「カゼイン石灰」加用五―一〇式「石灰ボルドウ液」

(ロ) 撒布期　二回撒布、分蘗期、開花期
三回撒布、分蘗期、出穂前、開花後

(4) 施肥量　一〇アール當ノ三要素量(瓩)

窒素二〇、燐酸一二、加里一二

播種十二月二十一日、挿秧一月二十日、收穫五月十九日

試驗成績

品種名	試驗區別	葉イモチ 苗代期	葉イモチ 分蘗期	穂イモチ	節イモチ	籾收量
臺中六五號	種籾消毒「ボルドウ液」二回撒布	ナシ	少	三・三%	二一・六%	一八・〇五瓩
	三回撒布	同	同	九・七	六・七	一五・三六
	無撒布	同	同	〇	九・一	一五・四五
	種籾無消毒「ボルドウ液」二回撒布	同	同	〇	四・二	一六・六三
	三回撒布	同	同	一・二	七・五	一四・三六
	無撒布	同	同	〇・三	六・八	一六・四八
高雄一〇號	種籾消毒「ボルドウ液」二回撒布	ナシ	少	〇	〇・三	一四・一七
	三回撒布	同	同	〇・三	〇・三	一四・〇三
	無撒布	同	同	〇	〇	一三・八一
	種籾無消毒「ボルドウ液」二回撒布	同	同	一・一	〇・四	一三・四六
	三回撒布	同	同	三・二	一・一	一三・二六
	無撒布	同	同	一・五	〇・六	一四・〇八

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

成績概要

苗代期ニ於テハ馬鹿苗病及ビ稻熱病ノ發生全ク無ク又本田挿秧後ニアリテモ天候甚シク乾燥シ降水、曇天等ノ日ハ極メテ少ナカリシ爲葉稻熱病ノ發生ハ頗ル輕微ニシテ、種籾消毒區、無消毒區、藥劑撒布區、無撒布區ノ區別ナク何レモ概シテ良好ナル成育ヲ遂ゲタリ。從ツテ收穫時ニ於テハ穗稻熱病竝ニ節稻熱病ノ被害モ亦少ク且各區間ニ殆ド輕重ヲ認メズ。又籾收量ニ於テモ格段ノ差ナキヲ以テ種籾消毒及ビ藥劑撒布ノ效果ヲ知ルヲ得ザリキ。

臺南州立農事試驗場

稻熱病防除試驗

目的

內地種水稻ノ栽培時期ヲ異ニシ各栽培時期ニ於ケル稻熱病ノ發生狀況ヲ檢知シ、其被害少ナキ栽培時期ヲ見出スルト共ニ防除法ノ基礎的參考資料ヲ得ントス。

試驗方法

(1) 供試品種　臺中六五號、嘉南二號、嘉南八號

(2) 試驗區竝ニ面積　一區　〇・二アール　二區制

(イ) 二月二十五日挿秧　標準肥料

(ロ) 三月　十　日挿秧　同

(ハ) 三月二十五日挿秧　同

(ニ) 二月二十五日挿秧　二倍量施肥

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

（ホ）三月十日挿秧　二倍量施肥

（ヘ）三月二十五日挿秧　同

(3) 耕種法

（イ）施肥量　一〇アール當ノ三要素量(瓩)

窒素一〇、燐酸一〇、加里一〇

（ロ）其他管理ハ常法ニヨル。

試驗成績

(1) 苗代期　各區ノ各品種共稻熱病ノ發生ナシ。

(2) 本田羅病調査(倍量施肥區)

挿秧月日	品種名	葉イモチ	穗イモチ	節イモチ	收量
二月二十五日	臺中六五號	ナシ	一・三五%	三・三七%	五、六八九瓩
同	嘉南二號	同	一・七〇	七・〇五	五、九六八
同	嘉南八號	同	一・五一	一・五一	五、九四四
三月十日	臺中六五號	同	四・二一	四・八一	三、九五三
同	嘉南二號	同	四・二一	四・八一	三、七九三
同	嘉南八號	同	二・九九	三・八〇	四、七六七
三月二十五日	臺中六五號	同	一〇・六三	一七・一〇	二、八九七
同	嘉南二號	同	五・四五	七・六五	三、〇六五
同	嘉南八號	同	二・一八	五・五九	三、三五九

(3) 成績概要

一月—二月ハ氣温概シテ低ク屢々寒冷ニ襲ハレタリシガ降雨少ナカリシ爲、苗代ノ管理ニ支障ヲ來サヾリキ。三月下旬及ビ四月上旬ハ小雨アリテ二月二十五日挿秧區ニ葉稻熱病ノ發生ヲミタルモ其後天候順調ニシテ遂ニ發生ヲ見ズ。爾後晴天續キ五月ニ至リテ降雨アリテ爾後引續キ降雨アリシガ、二月二十五日挿秧區ハ五月中旬旣ニ出穗ヲ了シ居リ穗稻熱病ノ罹病極メテ少ナカリキ。而シテ三月十日挿秧區ハ五月下旬出穗、三月二十五日挿秧區ハ六月上旬出穗シ、順序罹病率ノ昂上ヲ見ルモ大ナル被害ハ見ザリキ。節稻熱病ノ被害モ又輕少ナリト雖モ其罹病率ハ挿秧期ノ遲レルニ從ヒ漸次增加ノ傾向ヲ示セリ。是ヲ要スルニ本年度ハ稻熱病ノ發生被害輕微ニシテ各區、各品種間ニ大ナル差異ヲ認メ得ザルモ、穗稻熱病、節稻熱病ハ大體各品種共挿秧期ノ遲レルニ從ヒ明カニ罹病率ヲ增加シ、收量ハ相當明瞭ナル減收ヲ認メタリ。

臺中州立農事試驗場

一、稻熱病防除藥劑施用試驗

目的

化學肥料ニ混合施用セル化學物質ヲ吸收スルコトニヨリ水稻ガ稻熱病ニ對スル抵抗性ヲ獲得スルヤ否ヤヲ檢シ、ソノ應用ノ可否ヲ知ラントス。

試驗方法

(1) 供試品種　臺中六五號

(2) 試驗區竝ニ面積　一區　〇・一アール　一六區三區制

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

試驗區	〇・一アール當每回施用量	施用回數
無施用	—	—
沃度加里、苗代基肥混合	五	一
同　苗代及ビ本田基肥混合	五	二
同　本田基肥混合	五	一
同　本田基肥及ビ追肥混合	五	二
硫酸銅、苗代基肥混合	10	一
同　苗代及ビ本田基肥混合	10	二
同　本田基肥混合	10	一
同　本田基肥及ビ追肥混合	10	二
消石灰、苗代基肥混合	100	一
消石灰、苗代及ビ本田基肥混合	100	二
同　本田基肥混合	100	一
同　本田基肥及ビ追肥混合	100	二
硫酸銅＋消石灰、苗代及ビ本田基肥混合	10＋100	二
同　本田基肥混合	10＋100	一
同　本田基肥及ビ追肥混合	10＋100	二

(3) 耕種法

(イ) 施肥量 一〇アール當(瓩)

肥料名	基肥	第一回追肥	第二回追肥
硫酸アンモニア	四〇	四〇	四〇
過燐酸石灰	六〇	—	—
硫酸加里	二〇	—	—

第二回追肥ハ葉稻熱病罹病程度少ナカリシ爲分蘖最盛期前ニ特ニ追加施用ス。

(ロ) 其他管理ハ常法ニヨル。播種一月二十日、挿秧二月二十日、收穫六月十六日

試驗成績

(1) 苗代期 各區共稻熱病、馬鹿苗病ノ發生ナシ。

(2) 本田罹病調査

試驗區別	葉稻熱病	穗稻熱病	節稻熱病
無施用	小	三三・〇	二六・〇
沃度加里、苗代基肥混合	同	一一・三	一九・〇
同 苗代及ビ本田基肥混合	同	一九・〇	一五・〇

調査月日 葉稻熱病五月	五月十一日	六月六日	六月十六日
沃度加里、本田基肥混合	無―小	一二・一	二〇・八
同　本田基肥及ビ追肥混合	同	九・六	一〇・〇
硫酸銅、苗代基肥混合	同	二一・七	二〇・〇
同　苗代及ビ本田基肥混合	小	一三・八	二三・〇
同　本田基肥混合	同	一一・八	二三・八
同　本田基肥及ビ追肥混合	同	二〇・六	一九・〇
消石灰、苗代基肥混合	同	二〇・二	二〇・〇
同　苗代及ビ本田基肥混合	同	一五・二	一三・八
同　本田基肥混合	無―小	一七・七	二四・五
同　本田基肥及ビ追肥混合	小	一九・〇	二〇・〇
硫酸銅＋消石灰、苗代及ビ本田基肥混合	無―小	一三・〇	一八・八
同　本田基肥混合	小	一八・四	二〇・〇
同　本田基肥及ビ追肥混合	無―小	一四・四	一一・一

(3)　成績概要

（イ）稻熱病發生狀況　苗代期ハ連日最低氣温一五度以下ノ低温ニシテ苗ノ生育不良トナリ、寒害ヲ蒙レルモ稻熱病ハ例年ノ如ク發生ヲ見ザリキ。挿秧後ハ好天ニシテ分蘗初期ノ生育特ニ旺盛ナリキ。爾後登熟ニ至ル迄多照寡雨ノ天候連續シ、生育、出穗、登熟共ニ順調ニ行ハレタリ。例年ハ三月末ニ葉稻熱病ノ病斑出現スルモ、本年ハ

一部ノ水田ヲ除キ、一般ニ初發甚シク遲延シ、四月十日以後ニ至リ漸ク發生ヲ見タリ。是三月第五半旬並ニ四月第二半旬ニハ屢々季節風ニ伴フ一五度以下ノ低温ノ來襲アリテ稻熱病菌ノ發育抑制セラレタルニ由ルモノ、如シ。此事ハ感受性品種ヲ栽植セル一部ノ水田ニ於テ三月下旬ニ入ルヤ既ニ發病ヲ認メタルニ、同月末並ニ四月ノ低温ニ一時的ニ終熄セル事實ニヨリテモ推察シ得ベシ。爾後上述ノ如キ好天ノ連續ニヨリ發病極メテ少ク、羅病程度ノ判定ニ困難ヲ覺エタルモ、臺中特六號ノ如キ感受性品種ヲ多肥栽培セル圃場ノ流行狀況ヨリ推察スルニ猖獗期ハ四月二十日前後ナリキ。穗稻熱病ノ發生モ又一般ニ極メテ少ク、本期作ノ籾ハ清潔健全充實シ增收ノ一因ヲナセルモ、本試驗ニ於テハ羅病度ヲ增加セシメンガ爲分蘗極期ニ硫安ノ再追肥ヲ施セル爲甚シク發生セリ。

（ロ）試驗結果　本年度ハ葉稻熱病ノ發生極メテ少ナカリシ事並ニ再追肥ニヨル穗稻熱病ノ發生過度ニ大ナリシ事ニヨリ滿足ナル成績ヲ得ル能ハザリキ。然レドモ沃度加里ヲ本田ニ施用セル場合ハ明ニ葉稻熱病羅病程度少ニシテ穗稻熱病モ亦少ク、特ニ羅病初期ニ於テ極メテ明カナル差ヲ示セリ。他ノ藥劑ニ於テハ消石灰稍々有效ナルモノ、如ク、硫酸銅及ビ消石灰ヲ混用セル第一六區ニ於テ稍々效果擧リタル原因ハ消石灰ノ存在ニ歸セラルベシ。

藥劑施用ノ生育ニ及ボス影響ハ諸藥劑施用ノ場合ハ一般ニ分蘗稍々增加スル傾向アリ、出穗　沃度加里ニ於テ前年同樣僅ニ遲延スルモ、他藥劑ニ於テハ異常ヲ認メズ成熟ハ各區共殆ド同樣ナリキ。

收量ニ就テハ前年度ニ於テハ比較的明瞭ナル結果ヲ得、特ニ沃度加里施用區大ナリシモ、本年度ハ前記ノ如キ理由ニヨリ一定ノ傾向ヲ認メ得ザリキ。要スルニ本方法ハ十六年度ニ於テ明ニセル如ク、苗代ニ於テハ顯著ナル效果ヲ擧ゲ得ルモ本田ニ於ケルソノ施用法ニ就テハ猶研究ヲ要スベキモノナリ。

故ニ現狀ニ於テハソノ效果並ニ費用ノ點ヨリシテ中間作苗代ノ如ク苗稻熱病ノ被害ノ豫想セラルヽ場合ニ於テノミ應用ノ價値アルモノト認メラル。

二、稻熱病防除水滴除去試驗

目　的

莖葉ニ滯溜スル雨露霧及ビ溢泌等ニヨル水滴ノ除去ガ葉稻熱病ノ豫防ニ有効ナルヤ否ヤヲ檢セントス。

試驗方法

(1) 供試品種　臺中特六號、臺中六五號、臺中一五〇號

(2) 試驗區竝ニ面積　一區　〇・六二アール（一二四〇株）一區制

試驗區	處理時間	處理回數
一、流行全期處理	四月五日—四月三十日	二六
二、流行初期處理	四月五日—四月二十日	一六
三、無　處　理	—	—
四、猖獗期處理	四月十日—四月二十五日	一六
五、危險日處理	—	五

(3) 處理方法

水滴滯溜セル日ノ早朝七時ニ二〇米ノ麻繩ヲ持テル二人ガ試驗區ノ兩側ニ相對シテ引張リツ、葉面ノ水滴ヲ拂ヒ落シ二往復ス。

(4) 耕種法

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

施肥量ハ標準施肥法ノ倍量トス。

管理其他ハ常法ニヨル。

試驗成績

本試驗ニ使用セル圃場ハ試驗區ノ地力不均一ニシテ試驗區(一)最モ地力小ニシテ稻ハ最モ抵抗性トナリ、以下順次地力ヲ增加シ(五)ニ至リテ最モ多肥ノ感受性トナリ、特ニ(四)及ビ(五)ニ於テ發病最モ甚シカリキ。從ツテ罹病程度及ビ生育收量ハ地力ニヨリテ支配サレ、水滴除去處理ニヨル效果ハ明瞭ニ現レザリシモ地力ノ遷移ハ漸進的ナリシヲ以テ、各試驗區ノ境界附近ニ於テ相隣接セル二試驗區ヲ對比シテソノ效果ヲ窺フヲ得タリ、又臺中一五〇號ハ發病少クシテ試驗區間ニ差ヲ認メ得ザリシモ臺中六五號及ビ臺中特六號ニ於テハ相當ニ發病アリタルヲ以テ稍々明ナル觀察ヲナシ得タリ。卽チ此方法ニヨレバ穗稻熱病ニ於テハ殆ド差ヲ認メ得ザリシモ、葉稻熱病ニ於テハ或ル程度ノ差ヲ生ズル事ヲ知リ得ルモノニシテ、ソノ差ノ最モ著シキ猖獗期處理ト危險日處理トノ間ニシテ、次デ流行初期處理及ビ無處理ノ間ニモ相當ノ差ヲ認メ、更ニ流行全期處理及ビ流行初期處理トノ間ニ於テモ僅ニ差ヲ認メ得タリ。卽チ多數處理セル區ニ於テ罹病程度少ナリキ。要スルニ水滴除去ノ效果ハ葉稻熱病ニ對シテハ或ル程度認メ得ベキモ、其效果ハ稻熱病菌ノ侵入ノ機會ヲ減少スルニ因ルモノニシテ、水滴ノ除去ハ完全ナラシムルコトハ不能ナルノミナラズ、一旦侵入セル後ハ病勢進展ヲ防止シ得ザル等勿論ナレバ、其效果ハ或ル程度ニ止ル事ハ止ムヲ得ザル處ナリ。然レドモ其方法簡略ニシテ勞費ヲ要セザル點ハ農家ノ實情ニ適セル一法ト云フベク、其施行法ニ就テハ今後ノ研究ヲ要スル處ナリ。

附記

本試驗ハ稻熱病菌ノ寄主體侵入ト水滴滯溜時間トノ關係並ニ晝夜間水田稻株層ニ於ケル稻熱病菌分生胞子ノ撒布數トニ關スル實驗結果ヨリ立案セルモノナリ。卽チ一期作分蘖期夜間ノ温度條件下ニ於テハ附表(一)ニ見ル如ク水滴ノ滯

溜時間ニヨリ多數ノ菌ノ侵入可能ナリ。

然ルニ靜穩ナル氣象條件下ニ於テハ薄暮既ニ葉綠ニ溢液ノ滯溜ヲ見、翌朝露拂ヒヲ行フモ、ソノ滯溜時間相當長キニ亘リ、此間充分侵入可能ナリ。而モ露拂ヒノ時刻早キニ過グル時ハ幾何モナクシテ再ビ結露ヲ見ルノ難點アリ。然ルニ他方稻株層ニ於ケル分生胞子ノ撒布狀況ヲ檢スルニ、附表(二)ノ如ク撒布胞子類ハ猖獗時ト雖モ晝間ハ稀ニシテ夜間而モ深更ヲ過ギテ初メテ急激ニ夥シク多クナルモノナリ。此分生胞子ノ形成ニハ九〇%以上ノ高濕ヲ要スルニヨリ、自然ニ於ケル分生胞子ノ形成ハ夜間稻株層濕度ノ九〇%以上トナル深夜ニ至リテ始マルベク、ソノ撒布ハ更ニ形成初ヨリ胞子ノ成熟ニ要スル時間(概ネ一—二時間)ヲ經タル後始マルニヨリ深更乃至黎明前ニ至リテ漸ク盛トナルモノト認ムベキナリ。故ニ多數ノ菌ノ侵入ヲ開始スルハ黎明期トナルベク、早朝露拂ヒヲ行フトキハ分生胞子ノ侵入完了前ニ水滴ヲ剝奪シ、侵入ヲ妨害シ得ル理ナリ。

附表(一) 異ル溫度下ニ於ケル寄主體侵入ト水滴滯溜時間トノ關係

實驗溫度	左ニ相當スル生育期及ビ晝夜氣溫	水滴滯溜時間	潛伏期間	株當病斑數
二五·〇±一·〇	一期作苗代期平均氣溫	時 五	—	〇
		八	—	〇
		一二	—	〇
		一四	—	〇
一九·〇±〇·五	一期作分蘗期夜間氣溫	五	六	〇·〇一
		八	六	〇·〇一
		一二	六	〇·四三
		一四	六	一·〇〇

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

二六・〇±〇・五	一期作分蘗期晝間 二期作苗代及ビ分蘗期夜間氣溫	五 八 一一 一四	六 六 六 四	〇・〇一 〇・九〇 二・五〇 四・一〇
二八・〇±〇・五	二期作苗代及ビ分蘗期平均氣溫	五 八 一一 一四	六 五 六 五	〇・〇九 〇・〇九 三・八〇 七・〇〇
三二・五＋〇・五	二期作苗代及ビ分蘗期晝間氣溫	五 八 一一 一四	六 六 六 六	〇 〇・〇九 〇・〇八 二・八〇

附表（二） 晝夜時刻別稻熱病菌分生胞子採取數（昭和十八年四月）

月日	時刻	落下胞子數
四月二十一日	一〇時―一二時	一
同	一二時―一四時	三
同	一四時―一六時	一七九
同	一六時―一八時	七六
同	一八時―二〇時	九五
同	二〇時―二二時	九五
同	二二時―二四時	二八三

月日	時刻	落下胞子數
四月二十二日	〇時―二時	三,一〇七
同	二時―四時	五,〇五六
同	四時―六時	四,〇〇一
同	六時―八時	四,七六七
同	八時―一〇時	一,五八九
同	一〇時―一二時	三三二
同	一二時―一四時	二〇一
同	一四時―一六時	一三七

農業部農業試驗所
TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE
1895

新竹州立農事試驗場

稻熱病防除試驗

試驗方法

(1) 供試品種　臺中六五號、新竹四號

(2) 試驗區竝ニ面積

(イ)「ウスプルン」消毒　「石灰ボルドウ液」撒布區

(ロ)「ホルマリン」消毒　「石灰ボルドウ液」撒布區

(ハ)本田無處理區　(「ウスプルン」消毒苗代ノミ「石灰ボルドウ液」撒布)

(ニ)肥料分施區　(無消毒、無撒布、金肥三分ノ一、基肥三分ノ二ヲ三回ニ分施)

(ホ)對照區　(無消毒、無撒布)

面積　一區　〇・二アール　二區制

(3) 肥料竝ニ施肥量

肥料　堆肥、「硫酸アンモニア」、過燐酸石灰、硫酸加里

施肥量　一〇アール當ノ三要素量(瓩)

窒素一七・一、燐酸一八・〇、加里一七・〇

但シ苗代ニハ當場標準量ヲ施用ス。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

(4) 供試藥劑

（イ）種子消毒　「ウスプルン」「ホルマリン」共ニ一般慣行法ニヨル。

（ロ）撒布藥劑　第一―三回「マーミ」展着劑加用、四―八式「石灰ボルドウ液」
　　　　　　　第四回　「マーミ」展着劑加用、四―一二式「石灰ボルドウ液」

（ハ）藥劑撒布期　第一回　苗代期　　第二回　分蘖期
　　　　　　　　第三回　出穗前　　第四回　開花直後

(5) 耕種法

本場一般耕種法ニヨル。

播種二月二日、挿秧三月十六日

試驗成績

(1) 苗代期

（イ）稻熱病ハ各區共ニ發生ヲ認メズ。

（ロ）馬鹿苗病ハ種子消毒區ニハ發生少ク、特ニ「ウスプルン」消毒區ニハ殆ドナシ。無消毒區ハ稍々發生多シ。

(2) 本田罹病調査

品種名	試驗區別	葉イモチ	穗イモチ	節イモチ	籾收量
臺中六五號	「ウスプルン」消毒「ボルドウ液」撒布	無	七・六%	一・七%	四、三七七瓩
	「ホルマリン」消毒「ボルドウ液」撒布	無―小	五・五	一・二	四、五八七
	本田無處理	小―中	一三・三	四・二	四、六六四
	肥料分施	無	一〇・六	四・二	五、四七九
	對照	小―中	一三・三	三・一	五、一七〇

新竹四號	「ウスプルン」消毒「ボルドウ液」撒布	無—小	三・二	〇・八	四、二三九
	「ホルマリン」消毒「ボルドウ液」撒布	無—小	六・六	一・八	四、三三三
	本田無處理	小—中	一三・二	六・三	四、一五二
	肥料分施	無—小	六・〇	四・八	四、九三四
	對照	小—中	九・三	三・五	四、三六三

ノ（イ）葉稻熱病　本田挿秧後出穗期迄ノ天候概ネ良好ナリシモ、五月五日頃ヨリ若干葉稻熱病ノ發生ヲ見タリ。五月中旬頃迄病狀進展シ、是ガ被害狀況ヲ見ルニ臺中六五號、新竹四號共本田無處理區及ビ對照區ハ他區ヨリ發生多ク、被害程度中位ニシテ、局部的ニ被害程度大ナルモノアリ、「石灰ボルドウ液」撒布區及ビ肥料分施區ハ被害極メテ僅少ナリキ。五月中旬以後ハ病狀進展セズ。

（ロ）穗稻熱病　出穗後曇雨ノ天候稍々多カリシ爲カ五月末ヨリ六月初ニカケ各區共本病ノ發生ヲ見タリ。第一回、第二回調査共對照區及ビ本田無處理區ハ被害多ク、肥料分施區及ビ「石灰ボルドウ液」撒布區ハ被害稍々少シ。

（ハ）節稻熱病　本病ノ發生被害ハ各區共ニ輕少ナレ共、就中「ボルドウ液」撒布區ハ他ノ三區ニ比シ特ニ僅少ナリキ。

(3) 成績概要

以上ノ成績ヲ綜合シテ稻熱病ニ對シ處理法トノ關係ヲ見ルニ、苗代期ニ於テハ稻熱病ノ發生ナカリシ爲其成績詳カナラザルモ、馬鹿苗病ノ發生ハ無消毒區ニ多ク消毒區ニ少ナク、特ニ「ウスプルン」種子消毒ハ効果多キモノヽ如シ。

本田ニ於テハ對照區、本田無處理區ニ被害多ク、「石灰ボルドウ液」撒布區、肥料分施區ニ被害少シ。

臺北州立農事試驗場

稻熱病防除試驗

試驗方法

(1) 供試品種　臺中六五號、臺北八號

(2) 試驗區並ニ面積　一區　〇・三アールニ區制

(イ)「ホルマリン」種子消毒　王銅撒布區

(ロ)「ウスプルン」種子消毒　王銅撒布區

(ハ)無消毒　王銅撒布區

(ニ)無消毒　無撒布區

(3) 施肥量　一〇アール當ノ三要素量(瓩)

窒素　二一・四、燐酸　一三・〇、加里　二〇・一

苗代ハ當場標準施肥法ニヨル。

(4) 供試藥劑

(イ)種子消毒　「ホルマリン」、「ウスプルン」共一般慣行法ニヨル。

(ロ)撒布藥劑　王銅一〇匁、「カゼイン石灰」七匁、水一斗

(ハ)撒布期　植付直後、最多分蘗期、開花直後

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

(5) 耕種法

本場一般耕種法ニヨル。播種一月二十日、三月二十一日

試驗成績

(1) 苗代罹病調査（一坪〇・五立當）

區別	臺中六五號 稻熱病	臺中六五號 馬鹿苗病	臺北八號 稻熱病	臺北八號 馬鹿苗病
ホルマリン種子消毒區	無	二本	無	一本
ウスプルン種子消毒區	同	三	同	〇
無消毒區	同	七—九	同	四—六

(2) 本田罹病調査

品種名	試驗區別	葉イモチ	穗イモチ	節イモチ
臺中六五號	「ホルマリン」消毒、王銅撒布區	輕少	一〇・五%	六・六%
	「ウスプルン」消毒、王銅撒布區	同	一〇・五	七・三
	無消毒、王銅撒布區	同	一三・〇	六・一
	無消毒、無撒布區	同	三六・〇	二四・〇
臺北八號	「ホルマリン」消毒、王銅撒布區	輕少	一九・四	一五・六
	「ウスプルン」消毒、王銅撒布區	同	一〇・九	一八・二
	無消毒、王銅撒布區	同	一八・三	一一・五
	無消毒、無撒布區	同	三五・一	二五・四

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

(3) 成績概要

苗代初期ノ發芽狀況ハ概シテ佳良ナリシモ、二月上旬曇天打續キ氣温低下セル爲一時生育極メテ不良トナリタリ。

併シ乍ラ再ビ二月下旬ヨリ天候恢復シ氣温上昇シテ漸次生育ヲ盛返シタリ。

苗代期間中稻熱病ノ發生ハ認メザルモ、馬鹿苗病ハ臺北八號ノ「ウスプルン」處理區、其外各區ニ發病セルモ、消毒區ハ無消毒區ニ比シ發病本數少シ。

本田挿秧後ハ三月下旬—四月上旬迄曇天打續キ氣温低カリシ爲活着及ビ其後ノ生育稍々不良ナリシモ、四月中旬ヨリ極メテ良好ナル氣象條件ニ惠マレ其上灌漑水潤澤ニシテ生育漸次進ミ頗ル良好トナレリ。葉稻熱病ノ發生ハ昨年ニ比シ約一〇日遲レテ五月十二日各區共發生ヲ見タルモ極メテ輕微ニシテ、最多分蘗期迄ハ病狀稍々進ミタルモ下葉ヲ侵サレタル程度ニシテ區別ニ被害程度ノ差ヲ認メ得ザリキ。以後漸次終熄シ五月末ヨリ稍々氣温低下シ度々降雨アリタルモ、生育ニハ大ナル影響ナク順調ニ出穗スルニ至レリ。而シテ出穗數日後ヨリ「穗イモチ病」ノ發生ヲ見タルモ以後大ナル進展ヲ示サズ、被害輕微ニシテ各區ノ差異大ナラズト雖モ、藥劑撒布區ハ無撒布區ニ比シ罹病率少ク、「節イモチ病」モ亦同樣ノ傾向ヲ示シ藥劑撒布ノ効果ヲアゲタリ。

七月七、八日第一回ノ暴風雨ニ遭遇シタルモ略成熟期ニシテ、半倒伏セル程度ニテ稔實ニハ何等影響ヲ認メ得ザル狀態ニ止リタルモ降雨、其他ニヨリ收穫遲延シ、七月十七、十八日ノ第二回ノ暴風雨ニヨリ收量ヲ比較シ得ザル狀態トナレリ。

臺灣總督府農業試驗所

一、稻熱病防除試驗

目的

水稻稻熱病ニ對シ種籾消毒及ビ藥劑撒布ヲ行ヒ其效果ヲ知ラントス。

試驗方法

(1) 供試品種　臺中六五號、臺農四五號

(2) 試驗區竝ニ面積　一區　一・四アール一區制

（イ）「ウスプルン」消毒、「石灰ボルドウ液」撒布　臺中六五號

（ロ）同　同　臺農四五號

（ハ）無消毒　無撒布區　臺中六五號

（ニ）同　同　臺農四五號

(3) 耕種法

（イ）施肥量　一〇アール當ノ三要素量（瓩）

	堆肥	大豆粕	硫酸アンモニア	過燐酸石灰	硫酸加里
基肥	一五〇〇	五〇	―	二五	一〇
追肥	―	―	一〇	二五	―

（ロ）其他ノ管理ハ常法ニヨル。

播種二月三日、挿秧三月二十日

(4) 藥劑撒布

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

第一回苗代期、第二回分蘖期、第三回出穗前、「リノー」加用四―八式「石灰ボルドウ液」
第四回開花後、「リノー」加用四―一二式「石灰ボルドウ液」

試驗成績

(1) 苗代期罹病調査（一坪當）

試驗區別	品種名	稻熱病	馬鹿苗病
「ウスプルン」消毒、「ボルドウ液」撒布	臺中六五號	無	無
	臺農四五號	同	同
無消毒、無撒布	臺中六五號	無	六本
	臺農四五號	同	七

(2) 本田罹病調査

品種名	試驗區別	葉イモチ	穗イモチ %	節イモチ %	籾收量 瓩
臺中六五號	「ウスプルン」消毒、「ボルドウ液」撒布	小	五・五	三・三	六〇、五八五
	無消毒、無撒布	小	五・七	四・八	五一、七九二
臺農四五號	「ウスプルン」消毒、「ボルドウ液」撒布	小	六・〇	五・四	五一、二九五
	無消毒、無撒布	小	一一・六	一〇・〇	五八、八六五

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE

(3) 成績概要

苗代期間ハ例年ニ比シ氣温低ク、特ニ二月上旬及ビ三月上旬ノ二回ニ亘ル低温襲來ニヨリ發芽伸長ガ抑制サレ、例年ニ比シ草丈短シ。而シテ苗代ニ於テハ稻熱病ノ發生ナク、馬鹿苗病ハ無消毒區ニノミ僅カ發生セリ。

本田挿秧後モ亦四月中・下旬迄氣温低ク晴天少ク曇天多カリシ爲、伸長稍々劣レルモ分蘖ハ稍々多シ。雨後天候恢復シ、晴天續キ氣温高マリシヲ以テ生育ハ漸次良好トナレリ。

葉稻熱病ノ發生ハ例年ヨリ稍々遲レ五月十五日頃下葉ニ僅カニ散見サレ、以後多少增加ノ傾向ヲ示シタルモ大ナル進展ヲ見ズ、各區共ニ輕微ニシテ防除區ト無防除區ノ差異殆ド認メ難キ程度ナリキ。

穗稻熱病ハ出穗期以後發生ヲ見タルモ、是又甚シキ進展ヲ示サズ、極メテ輕少ニシテ兩區ノ差異殆ドナク、節稻熱病モ亦同樣罹病狀態ナリキ。

二、稻熱病ニ對スル各種藥劑撒布試驗

目的

各種撒布藥劑ノ稻熱病ニ對スル防除效果ヲ知ラントス。

試驗方法

(1) 供試品種　臺中六五號、臺農三四號

(2) 試驗區並ニ面積　一區　〇・一アール二區制

(イ)「石灰ボルドウ液」區　四―八乃至四―一二式

(ロ)「消石灰ボルドウ液」區　同

(ハ) 王銅倍量區　一立＝四瓦
(ニ) 王銅區　一立＝二瓦
(ホ) 「サンボルドウ」區　同
(ヘ) 「活性ボルドウ」區　同
(ト) 「ブラスト」區　一立＝二・五cc
(チ) 無撒布區

展着剤、各藥劑共「リノー」千分ノ三加用

撒布期、分蘗期、出穗前、開花後

(3) 耕種法

(イ) 施肥量　〇・一アール當(瓩)

堆肥　二〇、大豆粕　一、「硫酸アンモニア」　〇・四三、過燐酸石灰　〇・五〇、硫酸加里　〇・一七五

(ロ) 其他ノ管理ハ常法ニヨル。

試驗成績

試驗區別	臺中六五號 葉イモチ	臺中六五號 穗イモチ	臺中六五號 節イモチ	臺中六五號 收量	臺中六五號 藥害	臺農三四號 葉イモチ	臺農三四號 穗イモチ	臺農三四號 節イモチ	臺農三四號 收量	臺農三四號 藥害
石灰ボルドウ區	小	四・九%	三・六%	三・六四瓩	小	小	五・二%	四・九%	三・七三瓩	小

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

消石灰ボルドウ區	小	三・八	四・五	三・五九	小	小	七・〇	七・三	三・六三	小
王銅倍量區	同	八・五	五・二	三・七〇	同	同	五・八	五・八	三・六二	同
王銅區	同	九・一	五・〇	三・七七	同	同	八・七	九・一	三・八三	同
サンボルドウ區	同	一〇・三	六・四	三・九一	同	同	一一・〇	一〇・六	三・八三	同
活性ボルドウ區	同	一三・一	七・五	三・八〇	輕	同	一〇・六	八・一	三・七六	輕
ブラスト區	同	一三・九	六・九	三・七二	同	同	一〇・九	一三・四	三・八六	同
無撒布區	同	一五・八	五・六	三・八〇	無	同	一三・二	一六・九	三・七〇	無

(4) 成績概要

本期作ハ好天候ニ惠マレ全般的ニ稻熱病ノ發生被害輕少ニシテ各區ノ優劣ヲ斷定シ難シト雖モ、藥劑撒布區ハ無撒布區ニ比シ「穗・節イモチ病」ハ罹病率少ク、特ニ「石灰ボルドウ區」、「消石灰ボルドウ區」、王銅區ハ罹病率僅少ニシテ、前年度ニ於ケルト同様ノ効果ヲ認メタリ。

花蓮港廳立農事試驗場

稻熱病防除試驗

目的

肥料ノ施用量、特ニ加里ノ多用及ビ深耕如何ガ稻熱病發生防除ニ及ボス影響ヲ究メントス。併セテ種籾消毒藥劑撒布ノ效果ヲモ知ラントス。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

試驗方法

(1) 供試品種　臺中六五號

(2) 試驗區竝ニ面積　一區　〇・二アール

番號	試驗區別	耕度	施用量（ヘクタール當）窒素（瓩）	燐酸（瓩）	加里（瓩）
一	「ホルマリン」消毒、「ボルドウ液」撒布	普通耕	八〇	六〇	六〇
二	同	同	六〇	六〇	八〇
三	同	同	一六〇	一二〇	一二〇
四	同	同	一二〇	一二〇	一六〇
五	同	深耕	一六〇	一二〇	一二〇
六	同	同	一二〇	一二〇	一六〇
七	無消毒、無撒布	普通耕	八〇	六〇	六〇
八	同	同	六〇	六〇	八〇
九	同	同	一六〇	一二〇	一二〇
一〇	同	同	一二〇	一二〇	一六〇
一一	同	深耕	一六〇	一二〇	一二〇
一二	同	同	一二〇	一二〇	一六〇

播種二月二日、挿秧三月三日、收穫七月六日

試驗成績

(1) 苗代期罹病調査

試驗區別	稻熱病	馬鹿苗病
種籾消毒、藥劑撒布	ナシ	ナシ
無消毒、無撒布	輕微	一本

(2) 本田罹病調査

試驗區別	耕度	施肥量 窒素	施肥量 燐酸	施肥量 加里	葉イモチ	穗イモチ	節イモチ	籾收量
種籾消毒藥劑撒布	普通耕	八〇	六〇	六〇	小	七・五%	四・三%	六、五四五斤
		六〇	六〇	八〇	同	一三・六	三・〇	六、一四八
		一〇〇	一二〇	一二〇	同	一二・八	四・九	八、四七六
		一二〇	一二〇	一〇〇	同	一一・二	二・七	七、三八四
	深耕	一〇〇	一二〇	一二〇	小	八・〇	二・八	一〇、四三三
		一二〇	一二〇	一〇〇	同	八・八	二・七	九、三六〇
無消毒無撒布	普通耕	八〇	六〇	六〇	小	九・四	一一・一	六、三九六
		六〇	六〇	八〇	同	六・八	四・七	八、一七五
		一〇〇	一二〇	一二〇	同	七・四	一一・四	八、八五八
		一二〇	一二〇	一〇〇	同	六・六	九・六	八、一六二
	深耕	一〇〇	一二〇	一二〇	小	〇・七	二・八	一〇、七六四
		一二〇	一二〇	一〇〇	同	六・四	四・四	一一、〇七七

農業部農業試驗所
TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE
1895

(3) 成績概要

苗代期ハ低温寒照ニシテ苗ノ伸長惡ク、又無消毒區ハ著シク苗腐ヲ生ジ、輕微ナル稻熱病ノ發生ヲ見、又馬鹿苗病一本ヲ見タリ。消毒區ハ苗腐極メテ少ナク、稻熱病ノ發生ヲ見ズ又馬鹿苗病ノ發生ヲモ見ズ良好ナリキ。挿秧ニ當リテハ消毒區ハ順調ニ挿秧ヲナシ得タルモ、無消毒區ニ於テハ極メテ多クノ苗不足ヲ生ジタル爲三本トセリ。

四月上旬急激ナル温度ノ低下ヲ見、發病ヲ憂慮シタル處此時期ニ全區ニ亘リ輕微ナル稻熱病ノ發生ヲ認メタリ。
最多分蘖期ニ於テハ多照ナリシ爲四月上旬發生セル稻熱病モ其後病徵ノ進展ヲ見ズ輕微ナルマヽニ終結セリ。
「葉イモチ」ノ發生狀態ハ無消毒無撒布區、消毒撒布區ノ別ナク全區同樣ナリキ。
「穗イモチ」ハ第一回調査ニテハ消毒區ノ普通肥料加里多量區及ビ多肥料加里多量區竝ニ深耕區ノ窒素多量區ニ若干ノ發生ヲ見タル外、他區ニハ發生ヲ認メザリキ。「穗イモチ」ハ收穫前ノ調査ニテハ全區ニ若干ノ發生ヲ見タリ。就中消毒撒布區ハ無消毒無撒布區ニ比シ發生大ナルモノアリキ。「節イモチ」ニアリテハ無消毒無撒布區ハ消毒撒布區ニ比シ概シテ發生大ナル傾向アルヲ認メ、其中深耕區ハ一般ニ發生少ナカリキ。本試驗中苗代期ニ於ケル消毒、撒布ノ效著シキヲ認メ得タルモ、本田ニ於ケル「葉イモチ」、「穗イモチ」ニハ其效ヲ見ルコトナク、只「節イモチ」ニ於テノミ其發生ノ差ヲ見ル事ヲ得タリ。
收量ニ於テハ前年同樣無消毒無撒布區ハ消毒撒布區ニ比シ增收ヲ示シタリ。

協議事項

共同試驗

一、病理ノ部　前年通リ施行ノ事

二、昆蟲ノ部

主要食糧作物害蟲ニ關スル調査試驗、

(1) 稻作害蟲ニ關スル件
(2) 甘藷害蟲ニ關スル件
(3) 玉蜀黍害蟲ニ關スル件

十九年度ハ特ニ右事項ニ重點ヲ置キ調査試驗ヲナス。猶本件ハ全島農事試驗場長會議ノ節協力方要請ノ手筈ニ付、御承知置キヲ願フ。調査試驗要項細目ニ關シテハ別途打合セノ豫定デアル。

農業部農業試驗所 1895 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE

第十一回各州廳立農事試驗場病理昆蟲主任技術員協議會

協議場合及ビ開催日　昭和十八年一月二十二、二十三日　於臺灣總督府農業試驗所

協議次第

一、國民儀禮

二、開會之辭

三、農業試驗所長挨拶

四、農務課長訓示

五、指示事項

(一) 農用藥劑配給ニ關スル件

六、報告事項

(一) 昭和十七年度事業成績ニ關スル件

(二) 昭和十七年度ニ於ケル病害蟲發生狀況ニ關スル件

(三) 昭和十八年度事業計畫ニ關スル件

(四) 昭和十七年度協同試驗成績ニ關スル件

(1) 稻熱病防除試驗

(2) 小麥銹病發生時期調査

(3) 黃麻炭疽病調査

(4) 甘藷野螟蛾調査

七、協議事項

(一) 昭和十八年度協同試驗ニ關スル件

八、閉會之辭

會議出席者

府農務課

農務課技師　鈴木進一郎
同　屬　伊藤正盛
同　技手　內田稔也
同　雇　麻生四郎

州試驗場

臺北州　技手　朝井小太郎
同　市川五四郎
同　齋藤巖
同　高山正夫
新竹州　同　河野八郎
臺中州　同　橋岡良夫
臺南州　同　大島鹿三郎
高雄州　同　大隈孝

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

花蓮港廳

府試驗所　技手　吉野　尚

病理昆蟲科長　三輪勇四郎

農藝化學科長　鳥居・楤一

育種農藝科長代理　長谷川德久

同　技手　片山　廣

病理昆蟲科技師　德永芳雄

同　技手　楚南仁博

同　同　水戸野武夫

同　同　隈元吉照

府試驗所支所

嘉義　技手　福田　計

鳳山　同　加藤照孝

棉作指導所

西部　技手　鹽田弘行

東部　同　赤坂靜雄

所長代理挨拶

所長ハ去ル十二日急據比律賓ニ出張セラレマシタノデ私ガ代理トシテ御挨拶申上ゲマス。各位ニハ御多忙中ニモ拘ラズ御參集下サレマシテ恐縮ニ堪エマセン。顧マスレバ昭和七年農事試驗場長會議ノ決議ニ基キマシテ同年度卽チ昭和八年一月二十三日第一回ノ各州廳病害蟲主任技術員打合セ會議ヲ開催致シマシテヨリ年ヲ閱スル事旣ニ十星霜ニ及ンデオリマス。每年

一回ノ此會合ハ技術員相互ノ意志ノ疏通ヲ助成シ、同時ニ各州廳農事試驗機關ノ聯絡ノ緊密ヲ增シ、技術上ノ融和連繫ヲ圓滑ニ運ンデ本島農事上ノ發達ニ寄與スル處甚大ナルモノガアツタト確信シテオル次第デアリマス。中ス迄モナク病蟲害防除ニ關スル試驗研究ニ携ハツテオラレル各位ニハ米穀增產、或ハ他ノ農作物生產確保ノ一翼ヲ擔當シテ使命ニ邁進シテオラレル次第デアリマスガ、病蟲害防除ノ根本理念乃至ハ基礎的理論ト申スモノガ確立セラレテモ是ヲ實地ニ應用シテ其成果ヲ期スルニハ各地方ガ其民情、土地、氣象環境、人、能力、豫算等アラユル要素ヲ取リ入レテ考慮シナケレバナラナイノデアリマシテ、此點ガ特ニ各州廳擔當技術員ニ果セラレタ重大ナル使命デアラウト考ヘラレル次第デアリマス。此意味ニ於キマシテ臺北州、新竹州等北部ノ試驗場ハ近隣ニ府農業試驗所ガアルカラ比較的此方面ノ試驗研究ニ手ヲ拔ク傾向ガアルトスレバソレハ大キナ間違デアリマス。一方臺中、臺南、高雄、東部各地夫々其環境ニ卽應シテ有効適切ナル防除手段ヲ研究ス可キデ、例ヘバ氣温、雨量ノ變化等ハ申スニ及バズ、山脚地、平地、土質、土性ノ關係、中間作地帶、兩期作田、輪作關係等細目ニ亙ツテ考慮シナケレバナラナイノデアリマス。病蟲害防除ノ實際ハ個々ノ專門的知識ノミニテハ解決セラル可キモノデハナク昆蟲學、植物病理學ハ申スニ及バズ、農學、化學、物理學、氣象學、土壤學、肥料學等アラユル專門的知識ノ總親和ニ依ツテ初メテ價値アル研究ガ生レ有効ナル結果ガ期待セラレルノデアリマス。ソレヲシモ單獨デ行ハントスレバ樣々ナ困難ガ生ジ其解決ハ日暮レテ路遠シノ感ハオロカ百年河清ヲ待ツノ例ヘニモ漏レヌ結果トナルノデアリマス。個々ノ英雄主義ハ排除シ協力總親和ニ依ツテ與ヘラレタ使命ノ達成ニ完璧ヲ期ス可キデアリマセウ。此意味ニ於キマシテ本年度ハ夫々專門的立場ヨリ病害蟲試驗事項ニ注言ヲ得度イト云フ考ヘカラ特ニ育種農藝科長、農藝化學科長ノ參列ヲ得タ次第デアリマス。

第十一回目ノ本會合ガ從前ニモ增シテ有効ナル結果ヲ得ル爲ニハ參集各位ノ自覺ト熱誠ニ俟ツ處甚大ナルモノガアラウト考ヘル次第デアリマス。時局多端、御多用ノ中ニモ拘ラズ、特ニ府當局ヨリ多數ノ御參列ヲ得感謝ニ堪エマセン。以上ニテ御挨拶ヲ終リマス。

農務課長代理挨拶

鈴木技師農務課長ノ代理トシテ臨席シ、次ノ如キ所感ヲ述ベラル。

一、大東亞戰ニ於ケル農業ノ重大性ヲ說キ、益々技術者ノ活躍ヲ期待シテヤマナイ。

二、食糧問題ニ言及シ昭和十八年度ニ於テハ米穀朝鮮八〇〇萬石、臺灣ハ四〇〇萬石ノ比デ內地ニ輸出スル爲ニ臺灣ニ於テハ大イニ活躍ヲ豫期シナクテハナラナイ。（內地ニ於ケル十七年度產米ハ六七〇〇萬石デ前年ヨリ一二〇〇萬石ノ增產デアッタ）

三、米穀增產ニ伴ヒ肥料ノ配給ヲ要スルガ今日船舶ノ不足ニヨリ二割五分ノ減トナッテヰル。其點ヲ考慮シテ技術者ノ活動ヲ期待スル。

四、十年計畫ニヨル土地改良利用ノ方モ資材ノ不足ニヨリ進涉ヲシテヰナイ。又畑地ノ利用ノ方面モ資材並ニ勞力關係ノ不圓滑ノ爲ニ進涉シ得ナイ事ハ遺憾デアル。

五、肥料ヲ加用セズシテ增產ヲ計ルニハ一ニ農事試驗機關ノ技術ニ俟ツ外ナシ、各位ノ御研究ニ大イニ期待スル。

六、現時ノ情勢ヨリ食糧增產ノ効果ヲ擧ゲルニハ綜合力ニ俟ツ外ナシ。益々連絡ヲ緊密ニシテ邦家ノ爲ニ御奉公アランコトヲ期待スル。

指示事項

(一) 農業藥劑配給ニ關スル件

農務課ヨリ昭和十七年十一月ニ施行セラレタ配給統制要項ニ就キ說明アリ、併セテ十七年度ヨリ入手困難ナラント思料セラレル藥品トシテハ

(イ) ホルマリン

（ロ）水銀劑

（ハ）硫酸銅

ガアリ十八年度ニ於テハ此等ノ見透シハ益々減少スルニ至ラントノ事ナリ。是ニ對シ

（イ）新藥劑ヲ注文スル場合、效力ヲ臺灣ニ於テ試驗シタ場合ニハ特ニ配慮方ヲ依頼ス。

（ロ）配給統制ノ藥品ニ就キ重點主義ヲ採用シテハ如何。

（ハ）農藥業者ニ對スル統制、配給ノ時期等ノ問題ニ就キ討議ス。

尙種々ノ問題ニ就キテハ改メテ共同シテ協議シ度シト鈴木技師ヨリ提案アリ。

報告事項

臺北州立農事試驗場

一、昭和十七年度事業成績

技術者ガ居ラヌ爲試驗ヲ行ハズ。

二、昭和十七年度ニ於ケル病害蟲發生狀況

「イモチ病」ハ四月及ビ五月中旬ニ發生ノ徵候アリ。然シ地方的ニ且部分的ニ發生セルニトヾマル。宜蘭地方ノ地方試驗區ニハ葉稻熱病大發生セリ。

螟蟲ハ試驗場內ニ八月中旬ニ部分的ニ發生セルモ其數少ナシ。出穗後ハ一時的ニ發生セリ。

「イネトゲトゲ」ノ被害ハ部分的ニアリタルモ少ナシ。

農業部農業試驗所 1995

夜盜蟲ハ地方的ニ可成リ發生ヲ認メタリ。蔬菜類ノ病害蟲ニ就テハ試驗場內及ビ「ウライ」ニ於テ十六年十二月下旬及ビ十七年一月中旬ニ甘藍及ビ「ハナヤサイ」ニ病名不明ノ病菌ノ害ヲ蒙リタリ。尙發生狀況ヲ示セバ次表ノ如シ。(市川技手報告)

病害蟲發生狀況調査表

作物名	病名	發生期	場所	被害ノ程度	備考
甘藍	葉枯病	十六、十二、下旬	當場	甚シ	各品種
花椰菜	同	同	同	同	臺農系ハ稍々強シ
甘藍	同	十七、一、十	ウライ社		標本ノ鑑定ハ(德永技師)(限元技手)ニ依頼
豌豆	白澁病	一、十三	當場	甚シ	各品種
花椰菜	黑腐病	一、十四	同		「ベナレス」ニ發生
萵苣	腐敗病	十六、十二、下旬 十七、一、上旬	同		「シムソン」最強、「ニューヨーク」「ウエアヘッド」中、夏柔弱
韮	Aspergirus sp.	十七、一、上旬	同		葉先腐敗枯死、伸張シ得ズ。一六〇株中二株ニ發生
甘藍	葉枯病	一、中旬	宜蘭川域		
卷心白菜	腐敗病	一、中旬	新莊郡中港厝林永水	三—五%	水田裏作
甘藷	炭疽病	十六、十二、中旬	同	甚シ	旬日ニテ腐敗、各品種共綠色胞子ヲ生ズ
太葱	黑斑病		竹子湖	甚シ	伯州
同	小菌核病	三、上旬	農業試驗所	多シ	

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

太葱 葉葱	赤銹病	三、上旬	臺中、臺南、高雄	甚シ	
甘藍	腐敗病	四、上旬	當場	多シ	「サダヤ」晩生
胡瓜	ベト病	四、下旬	臺北市大直	初期	
同	ベト病 ウドンコ病	四、下旬	當場	初期	各品種
蕹菜	?	六、上旬	同	甚シ	葉柄ト葉ノ附着點ガ黒色ニナリ枯死
蓮	?	六、下旬	同		腐レテ圓ク小孔ガアク
杏菜	菌核病	十一、上旬	同		當場採種用ノモノニ發生、其儘枯死
水前寺菜	ボトリチス	十一、上旬	同	甚シ	花梗腐敗ス
葱	炭疽病	十一、上旬	同		根元及ビ根腐敗ス
葱頭	同	十、下旬	同		同
卷心白菜	サルハムシ	十七、一、上旬	同	甚シ	
豌豆	エンドウモグリバヘ	十七、一、上旬	同	最モ甚シ	
セルリー	蚜蟲	十六、十二、下旬 十七、一、中旬	同		
萵苣	チシャノヒゲナガアブラムシ	同	同		
芥菜	キスヂトビハムシ	十七、一、中旬	宜蘭市	少シ	(内地種)水田裏作ハ少ク、畑作ニ多シ
同	蚜蟲	三、上旬	中・南部	多シ	採種用ノモノニ發生、藥劑撒布セズ
大根	キスヂトビハムシ	四、下旬	當場	甚シ	採種用ノモノニ發生ス
同	ヒメナガメ	四、下旬	同	甚シ	

蓮	コガネムシ	十七、六、下旬	當場	少シ	
豇豆	キボシホソヘリカメムシ	自同六・上旬 至同七・下旬	同	多シ	莢中ノ粒ヨリ養分ヲ吸收ス。被害莢ノ粒ハ汚染シ肥大充實シ得ズ。完全粒殆無
同	カメムシ	同　六、上旬	竹子湖	多シ	
菜豆	インゲンモグリバヘ	同　三、上旬 同九、下—十、上	當場	甚シ	
薯蕷	ヤマイモカメムシ	同　九下—十下	當場	甚シ	
甘藍	「モンシロテフ」幼蟲	同　九下—十二下	各地	甚シ	海山郡板橋街江子翠特ニ甚シ
甘藍 球形甘藍 芥菜	コナガ	同　十二—一	當場		
菜豆	インゲンモグリバヘ			品種別ニヨリ被害程度ニ差アリ	被害甚シキ品種、「ケンタッキー」、「ワンダー」、衣笠、被害比較的少キ品種、虎豆、鵲豆、花豆、蔓無菜豆ハ被害甚シキ品種ナルモ、「ケンタッキー」ハ衣笠ニ比シ稍々少キガ如シ何レノ品種モ被害ヲ初期ニ受ケタル時ハ枯死スルモ、生育旺勢期ニ加害ヲ受ケル場合モ癒合組織ヲ生ジ開花結實ス。但シ此場合ハ收量少ナシ

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

本年度特ニ發生多キ害蟲ハ次ノ如シ。

一、「モンシロテフ」ノ幼蟲、十字科作物ヲ喰害ス（本年度ハ旱天續キ降雨少ナキタメノ原因ナリト思惟ス）

一、コナガ　十字科作物

一、インゲンマメモグリバヘ

一、ヤマイモカメムシ

三、昭和十八年度事業計畫

「イモチ病」ニ對シテハ抵抗性品種ヲ選定シ度シ。特ニ宜蘭地方ニ於テハ抵抗性強キモノヲ試驗シ度シ。

新竹州立農事試驗場

一、昭和十七年度事業成績

誘蛾燈ニヨリ試驗ス

一點大螟蛾	六月ハ前年ニ比シ一割ノ減少ヲ見ル 六月下旬―七月中旬ニ多シ、特ニ七月上・中旬ニ最モ多シ
「セジロウンカ」	五、六、七、九月ニ多シ。七月下旬最多ニシテ 前年ニ比シ四月ヲ除キ減少ス
螟蟲	七月中旬ニ多シ（發生ハ前年ニ比シ一ケ月遲ル）
「クロカメムシ」	誘蛾燈ニハ來集セザルモ圃場ニハ發生ヲ見ル

二、昭和十七年度ニ於ケル病害蟲發生狀況

一期作ニハ「イモチ病」ガ局部的ニ發生スルモ被害ハ微少ナリキ。

螟蟲ハ一期・二期共ニ被害ハ僅少ナリキ。

州全體ヨリ見ル時ハ、

	一期作	二期作
「イモチ病」	一九六四、六二甲	二三四、五五甲
「ゴマハガレ病」	二三八四、五〇	四八二一、八〇

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE

農業部農業試驗所

泥負蟲	六五三四、二二	―
鐵甲龜	七〇五、四〇	八九九、七四
浮塵子	二〇、〇〇	二四五五、〇〇
螟蟲	三九二、六六	五一五、二〇

其他「サツマイモノメイガ」、「アリモドキザウムシ」、「ワタノメイガ」、「フタテンコミドリヨコバヒ」等ノ被害大ナリキ。

蔬菜類ニテハ甘藍ニ夜盜蟲、大根ニテハ「キスヂトビハムシ」、「サルハムシ」ノ害ヲ認ム。

三、昭和十八年度事業計畫

誘蛾燈ニヨリ調査ヲ繼續セン。

特ニ「チヤイロテンタウ」ノ調査ヲ行ヒ度シ。是ハ十七年度ニ於ケル誘蛾燈ニ來集セルモノ多キガ故ナリ。

「イモチ病」ハ協同試驗ニ附隨シテ耕種法ニヨル防除試驗ヲ行ヒ度シ。

質疑

(化學科長) 石灰窒素ヲ加ヘルト「イモチ病」ノ發生ガ少ナイト云フガ事實カ。

(鈴木技師) 耕種法ノ項目如何、又「イモチ病」ノ減少ノ見込アリヤ。

(河野技手) (イ) 「イモチ病」ノ減少ノ見透シハナシ。

(ロ) 深耕法、施肥法ノ外十六項目ヲ用意ス。

臺中州立農事試驗場

一、昭和十七年度事業成績

事業年報ヲ參照サレ度シ。

重點ヲ「イモチ病」ノ防除ニ置キ、種子、稻藁ノ消毒ヲ行ヒテ防除シ得ルヤ否ヤヲ試驗セリ。又此外ニ新ラシキ良法アルヤ否ヤヲ檢討セル結果、抵抗性品種、環境ニ對スル方面ノ研究ニ意ヲ注グ可キ事ヲ知レリ。消毒ニヨル方法ハ餘リ重要性ヲ有セズ。

藥劑ノ點ヨリ見ルニ「石灰ボルドウ」及ビ「クボイド」ガ良好ナラント思料セラル。

接觸劑ノ試驗ハ實驗シ得ザリキ。

二、昭和十七年度ニ於ケル病害蟲發生狀況

（イ）稻　「イモチ病」「葉イモチ病」ハ少ク、只氣候的ニ左右セラレタル所ニ於テハ稍々發生ヲ見タリ。

「穗イモチ病」ハ地方的ニハ稍々被害ヲ認メタリ。

菌核病　落水期ヲ誤リタルモノニハ多ク發生セリ。

螟蟲　平常ナミ。

浮塵子　八、九月中暴風ガアリシ爲發生僅少ニシテヤム。

「イネザウムシ」彰化郡ニ於テ遲植ノ地方ニ多ク發生セリ。

（ロ）小麥　高温ノ爲出穗ガ促進サレシ爲赤銹病ガ少ナカリシガ、黑銹病ノ方ハ是ニ反シ高温ニヨリ多ク發生セリ。

（ハ）棉　三回ノ暴風ニヨルモノカ「フタテンコミドリヨコバヒ」ノ發生ハ少シ。「アカホシカメムシ」ハ一四―一五箇

ノ中、三、四箇ノ被害ヲ受ク。然シ大體ニ於テ例年ヨリ豐作ナリキ。

藥劑撒布ノ結果、「ネオトン」ノ效果ハ遲ク現ル、モ效力ガ長ク持續スル特長アリ。「ピレオール」ハ效果ハ早ク現ル、モ又再ビ被害ヲ受ケ易イト云フ缺點アルヲ知レリ。

「フタテンコミドリヨコバヒ」ニ抵抗性ノアル品種ハ臺中三、四、六、九、一〇號、育棉一號等デアル。

（二）「ローゼル」、棉、「ソバ」ニ「アハヨタウ」ノ發生多ク、試驗區ニ於テハ特ニ秋ニ此害ヲ見タリ。

三、昭和十八年度事業計畫

「イモチ病」發生防除法ノ新法ノ發見ニ努力シ度シ。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

臺南州立農事試驗場

一、昭和十七年度事業成績

「イモチ病」ガ一株ニ就キ三—四葉ニ發生甚シク、遲植ニテハ被害少ナシ。棉ノ害蟲ニ對シテハ「デリス」、「カンコウ」、「デリゲン」、今津殺蟲劑、除蟲菊、「ピレオール」、「トミノー」等ヲ使用セルモ、「デリス劑」ガ成績良ク、「カンコウ」、今津殺蟲劑ノ順ニ效果ヲ認ム。

「ワタノメイガ」ニ對シテハ砒酸鉛、砒酸石灰、「デリス」ヲ撒布シタルモ、「デリス」二〇〇瓦ガ最モ效果アルヲ認メタリ。

二、昭和十七年度ニ於ケル病害蟲發生狀況

試驗場內ニテ觀察シタル結果、「セジロウンカ」ハ七月十一日以後ハ發生ヲ見ズ。是ハ暴風雨ノ爲ト思料ス。

「ユウレイセ、リ」ノ發生ヲ僅少乍ラ認ム。
「フタテンコミドリヨコバヒ」ガ七月ノ初旬ヨリ發生ス。
棉作ノ點ヨリ見レバ今年度ハ中庸ナル成績ナリキ。
病害ニ就テハ魚藤ニ二月中旬ヨリ被害ヲ見、三月ニハ「デリス」ニモ傳染セリ。落花生ニ九月下旬ヨリ「テングス病」ニヨル被害ヲ認メタリ。

三、昭和十八年度事業計畫

從來通リ實行シ度シ。

高雄州立農事試驗場

一、昭和十七年度事業成績

資料ナシ。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

二、昭和十七年度ニ於ケル病害蟲發生狀況

「イモチ病」ハ氣候ニ左右サレ一期作ニ少シク發生ス。州下ニ於テ是ヲミルニ潮洲郡ニ多シ。
蟲害ハ浮塵子ガ苗代ニ少シク發生、然シ各郡共ニ石油配給ノ要ナキ程度ニ僅少ナリキ。
「クロカメムシ」ガ屛東郡ノ九塊ニ少シク發生セルモ煙草屑ニヨリ驅除ヲ行ヒタリ。
「タテハマキ」ハ屛東郡下ニ發生セリ。
螟蟲ハ一期作ニハ餘リ發生ヲ認メザルモ、二期作ニハ大發生セリ。鳳山、岡山、高雄ニ於テハ二—三割ノ發生率ヲ認

メタリ。

棉ノ害蟲トシテハ「ハスモンヨタウ」ノ發生ヲ見、是ハ最初田菁ニ加害七月ニ至リテ棉ニ加害セリ。尙「カメムシ」モ相當發生ヲ見タリ。

黃麻ニハ炭疽病ガ可成リ發生ス。

三、昭和十八年度事業計畫

十七年度事業ヲ繼續、他ハ事業計畫書ヲ參照サレタシ。

花蓮港廳立農事試驗場

一、昭和十七年度事業成績

資料ナシ。

二、昭和十七年度ニ於ケル病害蟲發生狀況

「イモチ病」ハ試驗場圃場ニ於テハ少シ。然シ玉里、大里方面ニテ本病ニヨリ一・二期作共收穫皆無トナレル所アリ。

浮塵子ハ乾燥ノ爲ニ花蓮郡ニ發生ヲ見タリ。然シ乍ラ收穫ニハ支障ナシ。被害ヲ可成リ受ケタルハ豐田附近ナリキ。

螟蟲ニ對シテハ螟蟲驅除競技ヲ國民學校ノ兒童ニ試ミタル處、八月ニ於テ二〇〇萬箇（一・二期作合シテ）ノ螟蟲及ビ螟卵ヲ得タリ。泥負蟲ハサシタル被害ナシ。

三、昭和十八年度事業計畫

協同試驗、抵抗性品種ニ對スル試驗並ニ棉ノ害蟲ニ對スル藥劑試驗ヲ行ハン。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

質疑

(橋岡技手) 玉里ノ「イモチ病」ニ就キ説明ヲ乞フ。

(吉野技手) 臺中六五號ヲ栽植、土壤ニハ鹽分ヲ含ム。排水ハ良好ナリ。被害程度ハ原形ヲ留メザル程度ナリキ。

西部棉作指導所

一、昭和十七年度事業成績

技術者ノ配置ナク試驗施行セズ。

二、昭和十七年度ニ於ケル病害蟲發生狀況

氣象條件ハ良好ナリシモ期待ノ收量ヲアゲ得ザリキ。是ハ害蟲發生甚大ナリシ事ニ基因ス。

三、昭和十八年度事業計畫

(イ) 播種試驗ヲ行ヒ度シ。
(ロ) 病害ニヨル發芽率ノ影響ヲ觀察シ度シ。
(ハ) 藥劑ニヨル病蟲害ノ防除試驗ヲ行ヒ度シ。

今年度ニ於テハ今津殺蟲劑、「ピレオール」、「デリス乾根」ヲ毎月平均三回撒布シタルガ效果ノ程度ハ不明、但シ「ピレオール」ヲ最モ多ク使用セリ。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH 1895

東部棉作指導所

一、昭和十七年度事業成績

資料ナシ。

二、昭和十七年度ニ於ケル病害蟲發生狀況

稻　敷島村ニ於テ水田二〇甲ニ「イネザウムシ」發生セリ。

樟原村ニ於テ「フクラスヾメ」ガ發生シ六〇甲ノ被害ヲ蒙レリ。

棉　臺農三及ビ九號ヲ試作、早植セル關係カ病蟲害少ク、收穫期ニ於テ收量ニ影響ヲ認メザリキ。

質疑

（福田技手）「ワタアカミムシ」ノ發生如何。

（赤坂技手）八月下旬ニ僅カ發生ヲ見タルモ早植ノ關係カ被害ハ少ナカリキ。

農業試驗所鳳山支所

一、昭和十七年度事業成績竝ニ病害蟲發生狀況

資料ナシ。

二、昭和十八年度事業計畫

臺灣ニ於ケル南部ノ園藝作物、卽チ鳳梨、蔬菜ニ重點ヲ置キ基礎的調査ヨリ開始セン。

農業部農業試驗所 1895 AGRICULTURAL RESEARCH

農業試驗所嘉義支所

一、昭和十七年度事業成績

（イ）棉ノ害蟲　棉花會社ニ於テ試驗シタル處「ワタアカミムシ」ノ被害甚大ニシテ、完全開花ガ九％ニ過ギズ。被害五・一％ナリキ。「クサオビリンガ」ニヨル被害ハ三％、「ワタアカミムシ」、「クサオビリンガ」ノ二種ニヨルモノ一三％、「クサオビリンガ」及ビ病害ニヨルモノ一七％、「ワタアカミムシ」、「クサオビリンガ」及ビ病害ニヨルモノ六％、其他一％ノ結果ヲ得タリ。

（ロ）「ラック介殼蟲」　寄生蜂多ク十分ナル結果ヲアゲ得ザリキ。寄主植物ニハ二〇種ヲ選定シ試驗ヲ行ヒ居ルモ、從來寄主トシテ良好ナラズトサレ居タル龍眼樹ハ良好ナル成績ヲ得ル確信ヲ得タリ。

（ハ）「ワタアカミムシ」ノ防除試驗

「デリス粉石鹼液」、除蟲菊石鹼液及ビ今津殺蟲劑ノ三種ノ藥劑ヲ使用試驗シタル處、「ワタアカミムシ」ノ蒴內喰入防止歩合ハ無撒布蒴ニ比較シ孰レモ少ナク、除蟲菊石鹼液及ビ今津殺蟲劑ハ「デリス劑」ニ比シ效力稍々優レルヲ知レリ。尙一部ニハ藥劑ノ撒布ハ棉蕾及ビ蒴ノ落下率ヲ高メルト考ヘオル向アルモ、元來棉ハ生理的ニ落下スルモノ多ク、藥劑ヲ撒布シタル爲ニ落下蕾及ビ蒴ノ被害率ガ增大スルモノニ非ズ。殊ニ前記藥劑ヲ撒布シ調査シタル處影響ヲ認メザリキ。又收量上ニ如何程ノ效果アルヤニ就テハ目下成績整理中ニ就キ後日報告ス。

二、昭和十七年度ニ於ケル病害蟲發生狀況

（イ）特殊藥用植物（王咲ツヅラフヂ）ニ對シ「タイワンオホコホロギ」ノ加害ハ昨年ニ於テハ極メテ多カリシモ本年ニ於テハ栽培地ヲ變更シタ爲非常ニ少ナカリキ。

農業部農業試驗所 1895 AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE

（ロ）棉ノ害蟲ハ昨年ニ比シ一般ニ稍々少ナカリシガ棉花會社ニ於ケル「ワタアカミムシ」ノ加害ハ甚大ナリシ由、其調査成績ヲ記スレバ次ノ如シ。

被害状況

調査別	蒴數	完全蒴	棉赤實蟲	クサオビリンガ	病害	棉赤實蟲、クサオビリンガ	棉赤實蟲、病害	棉赤實蟲、クサオビリンガ、病害
三室	一二	二	二	〇	〇	三	三	二
四室	二二二	一八	一二七	六	三	二八	二七	一三
五室	四八	六	一七	三	〇	七	一二	三
計	二八二	二六	一四六	九	三	三八	四二	一八
被害歩合	—	九·二	五一·八	三·二	一·〇	一三·四	一七·三	六·三

蒴室ノ被害歩合

	調査蒴數	蒴總室數	被害總室數	完全室數
三室蒴	二	六	三	三
四室蒴	一二七	五〇八	五三一	一七七
五室蒴	一七	八五	四一	四四
計	一四一	五九九	三七五	二二五

又「ワタアカミムシ」加害ニ依ル棉種子ノ重量ヲ見ルニ、被害莢内ニ於ケル無被害室種子又ハ被害室内ノ健全種子ハ孰レモ完全莢種子ニ比較シ劣ルヲ知ル。其成績ハ次ノ如シ。

種子ノ被害率（瓦）一〇〇粒

		一室被害	二室被害	三室被害	四室被害
完全莢		九・〇	九・五	八・七	九・二
被害莢	無被害室種子	七・七	八・九	八・三	七・九
	被害室内ノ健全種子	七・四	八・一	七・六	七・八
	被害種子	四・九	四・五	五・八	六・一

（ハ）「サボヂラ」ニハ「ミカンコミバヘ」ハ前年度ニ比シ發生少シ。

（ニ）一點大螟蛾ハ稍々前年度ニ比シ發生多シ。

三、昭和十八年度事業計畫

「ワタアカミムシ」ノ調査研究ニ最モ力ヲ注ギ度シ。特ニ越冬狀態ノ觀察ヲ行ヒ度シ。

農務課害蟲係

益蟲蕃殖ニ就テ

「テンタウムシ」類二種ヲ飼育シ居タルモ現在ハ大體室内増殖ノ要ナシ。「ウリミバヘ」ニ對シテハ「オピウス蜂」ノ増殖

ヲ圖リツ、アリ。

本種ハ大正二年、布哇ヨリ輸入シ全島ニ放飼シタル處、大正ノ末年ニハ南部ニ蕃殖ヲ見、北部臺北新竹ニ於テハ氣候的ニ土着困難ナリト認メラレシガ、昨年臺北三郡ニ土着シ居ルヲ確認セリ。故ニ將來未ダ土着シ居ラザル地方ニ蕃殖セシムル樣努力セントス。「クリプトテンタウムシ」モ臺灣北部ニ土着スルモ未ダ南部ニ於テハ少キガ故ニ是ガ蕃殖ニ力ヲ注ギ度シ。

昭和十七年度協同試驗成績

(1) 稻熱病防除試驗
(2) 小麥銹病發生時期調查
(3) 黃麻炭疽病調查

（以上ハ次掲ノ表ヲ參照サレ度シ）

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895